女子新國語讀本

新制版

卷一

375.9
Om15
資料室

42364
教科書文庫
4
810
42-1938
20000
36ニ77

375.9
Om15

資料室

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一 共編

女子新國語讀本

新制版

文部省檢定濟 昭和十三年二月十五日
高等女學校 實業學校 國語科用

修文館發兌

広島大學
教
63430
図書

曉の富士

（第六課參照）

編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

一　**國民精神の體得**―これに就いては、國體の精華國民の美風、偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。

二　**文學精神の涵養**―これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては樣式の種々相に亙り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。

三　**國語精神の把握**―これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界の情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木枝增一
澤瀉久孝

目次　卷一

一　希望の春　編者　一
二　天の愛子　徳富蘆花　六
三　われら日本を愛す　中勘助　一〇
四　言葉の愛　島崎藤村　一三
五　自國語　上田萬年　一七
六　曙の富士　小泉八雲　二一
七　伊勢參宮　五十嵐力　二四
八　新緑　荻原井泉水　三一
九　犬ころ　長谷川二葉亭　三八
一〇　二つの世界　小川未明　五一
一一　飼ひもの　野上彌生子　六二

一二　涼み臺　吉村冬彦　七〇
一三　七夕祭　吉田絃二郎　八〇
一四　良寛さま　相馬御風　八四
一五　文字　編者　九一
一六　なぎさ　山村暮鳥　一〇四
一七　現代短歌抄　一〇八
一八　歌話　中邨秋香　一二四
一九　汝の母　姉崎嘲風　一二八
二〇　空の紀行　大佛次郎　一三八
二一　秋の小天使　薄田泣菫　一三八
二二　萩の原　若山牧水　一四九
二三　用水　遠藤老物語　一五
二四　百年の計　駿臺雜話　一六三

附錄
國語假名遣表
常用漢字表
略字表
國字表

……終……

女子新國語讀本 新制版 卷一

一希望の春

編者

わけても
やうに
ゐる
よう
爛漫（ランマン）と
瑞々しい
やはらかい

春が來ました。年毎に變らず來る春ながら、今年の春はわけても新しい姿でやつて來たやうに思はれます。野にも山にも充ち滿ちてゐる春の生氣が、希望と力とを新しく私達に與へようとしてゐます。霞の奥から流れて來るかゞやかしい春の光、爛漫と咲きこぼれてゐる櫻花の色、はやくも瑞々しい綠をやはらかい

さては　ほがらかに　象徴する　象（豕）

反省　自覺

入らう　をり　洋々たる

春風になびかせてゐる柳の絲、さては、ほがらかに聞えて來る雲雀の歌聲、何一つとして若い私達の心を象徴してゐないものは無いやうに思はれます。

丁度この時、私達は新しく女學生としての第一歩を踏出しました。何といふ喜ばしいことでせう。併し、私達はその喜に對して十分なる反省と自覺とがなければなりません。私達は今や女學生としての大切な出發點に立つてゐると共に、日本婦人としての重要なる修養期に入らうとしてをります。私達は洋々たる前途に對して、勇ましく、力強く歩み出さなければなりません。

肇國　肇（聿）　はぐくむ　無比　無（灬・火）　繼承者　創造者　創（刂・刀）　金甌無缺　金（金）　體得する　萬邦　照破する　承ける　承（手）　使命　重且大

私達は日本國民であります。上に萬世一系の天皇を戴き、肇國以來の光輝ある歴史にはぐくまれて來た日本帝國の臣民であります。私達はこの世界無比の帝國の繼承者であると共に、又、これに新しき生命を與へる新日本の創造者でなければなりません。金甌無缺の尊い國體の精神を體得して、萬邦を照破する日本精神に一段の光を添へなければなりません。舊きを承けて新しく生かすところに新日本國民の使命があるのです。これこそは實に父祖が偉業をなしとげた唯一の道でありました。又、私達が日本國民として生きる唯一の道であります。私達の責務は重且大と言

天賦の道
天(大)
推移
輕薄な
西洋かぶれ
獨得

はなければなりません。

私達は又日本女性であります。女性には女性として與へられた天賦の道があります。この天賦の道が日本精神に磨かれて光を發したものが日本の婦德です。これは時勢の推移と變遷とに應じて、その現れに多少の相違がありましても、その根本精神は少しも變らず生きて來ました。新しい婦德とは輕薄な西洋かぶれを言ふのではありません。日本獨得の婦德を新しく生かして行く事であります。私達が日本國民として生きるのは、この日本女性としての婦德を通してでなければなりません。私達には十分の覺悟が必要

友邦
友(又)
親善交誼
親(見)交(エ)
：を以て任ずる
安易な
易(日)
しばえ。
足どり

であります。（したし國）

日本は今や友邦滿洲帝國との親善交誼日にあつく、東洋永遠の平和の指導者を以て任ずると共に、世界に向かつて廣く昭和新日本の國光を仰がせるに至りました。將來日本の育成者たるべき私達としても、安易な心持で勉强してゐる譯にはいかなくなりました。同時に又、ます〳〵勉强のしばえがある譯であります。

樂しい春、樂しい女學生生活、希望に滿ちた昭和の大御代。私達はこの洋々たる前途に向かつて、若々しい元氣と力とを籠めて、しつかりした足どりで進んで行かうではありませんか。

德富蘆花
名は健次郎、熊本縣の人、小説家、昭和二年（一九二七）歿、年六十。

已惚
皇天
秘藏子

意匠
意（心）

勿體ない

二天の愛子

德富蘆花

日本に生まれたことを感謝する。

どう思ひ直しても已惚ではなかつた。事實である。日本は皇天の祕藏子だ。

世界の地理・歷史から日本の地理・歷史に返つて見れば見るほど、私は天の意匠の指痕を鮮に讀む。世界のために日本を育てるため、天はどれほど面倒を見たことか。父の嚴、母の慈、あらゆる手を盡くして、日本は今日まで育てられた。勿體ない大御親の心盡くしに、私は感激せずには居られぬ。否でも應でも、日本は天の

核
核（木・六畫）

要
嘗（口）

名のる
疾くに
世間見ず

愛子だ。

世界地圖に見る日本の小ささよ。小さいが當然。種子は小さい、核は小さい、要は小さい。私は嘗て歌つた。

日輪は見る目に小なれど光世界を照らす。

日本は地圖に小なれど志は四海を懷く。

世界の何處に「日」を旗章にする國があるか。自ら日本と名のつた時に、「日」を旗章と定めた日に、日本の位置と天職は疾くに定まつてゐた。

世間見ずであつてはならない。だから、明治維新の

凡百

初め、大いに知識を世界に求めたのだ。日本は日本の貧しさを知つて居る。古今東西、優秀なものが日本に乏しくて、他の兄弟にあつた。併し日本はそれをとり入れた。また、とり入れようとして居る。

私は日本の病を知つて居る。併し、私は失望せぬ。日本を支配するものは瑞々しい生命だ。日本の衷に火が燃える。嘗て富士を一夜に聳えさせ、今も阿蘇・淺間を煙らす火、恒に新な創造の火、その火が日本の衷に燃える。日本が身慄ひして起つ時、凡百の病は日の前の夜のやうに逃れる。

私は日本の若さを知る。日本は若い、きまりがわるいほど若く幼い。二千何百年の歴史を脱いで明治維新に生まれ返つて、やつと半世紀、過ぎたばかりだ。若いが當然だ。若いが生命だ。生命は成長する。私は日本の前途を信ずる。

應ずるものへの豫言、著くもののための座、負ふものの使命・自覺だ。日本は潔く定められた天の愛子の座に著く。

（太平洋を中にして）

ヨゲン
豫言
豫（家）

太平洋を中にして
徳富蘆花著、主として日本と諸外國との國際關係を中心にした感想文を集める、大正十三年三月九月刊行。

中　勘助
東京市の人、文學者、明治十八年（一八八五）生。

三　われら日本を愛す

中　勘助

ああ日本、
われら日本を愛す。
そは東天にのぼる太陽なり。
光なり、
力なり、
命なり。
さしのぼる太陽をなにものか空にとゞめ得る。

機之音
中勘助著、詩集、詩五十篇を集める、昭和十一年（一九三六）五月刊行。

ああ日本、
われらが國、
われらが祖先の國、
われら日本を愛す。
そは東天にのぼる太陽なり。
光なり、
力なり、
命なり。
さしのぼる太陽をなにものか空にとゞめ得る。
（機之音）

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、小說家、詩人、明治五年(一八七二)生。

四言葉の愛

島崎藤村

一 言葉の愛

「父さん。」

と、太郎が側へ來て、外國ではどんな言葉を話すかと尋ねるものですから、

「そりや佛蘭西では佛蘭西語さ、英吉利へ行けば英語を話すやうに。」

と、父さんが言つて聞かせました。

「子供でも？」

と、また太郎が尋ねました。

肴(肉)

思ふさま

つく〴〵

幼なごころ

太郎よ。佛蘭西では、お肴屋さんでも、八百屋さんでも、みんな佛蘭西語です。鉛筆一本買ひに行くにも、日本の言葉では通じません。「今日は。」なんて言つたつて誰も解るものが有りません。

さういふ遠い國へ行くと、自分の國の言葉が戀ひしくなります。かうしてお前達に話すやうな國の言葉が思ふさま使つて見たくなります。國の言葉で書いた本が讀みたくなります。父さんは外國に暮して見て、つく〴〵日本の言葉の有難味を知りました。

お前達は幼なごころにも、言葉を愛することを知つて、そして、勉强したら、どんなに仕合はせだらう。(藤村讀本一)

邊鄙な　なまり
鄙びる
鄙(ヒ(右))・邑
馬　籠　長野縣西筑摩郡神坂村、藤村の生まれ故郷。
ちひさな

二　ふるさとの言葉

山や林は父さんのふるさとです、とお前達にお話しましたらう。山や林ばかりでなく、言葉も父さんにはふるさとです。邊鄙な山の中の村ですから、言葉のなまりも鄙びては居ますが、人の名前の呼方からして馬籠は馬籠らしいところがあります。たとへば、末子のやうなちひさな女の子を呼ぶにも、

「末さま。」

と言つたり、もつと親しい間柄で呼ぶ時には、

「末さ。」

と言つたりしまして、鄙びた言葉の中にも何處か優し

おへない

いらつしやる

いところが無いでもありません。

父さんの田舍には「どうねき」などといふ言葉もあります。もう仕末におへない樣な人のことを「どうねき」と言ひます。こんな言葉は木曾にだけあつて、他の土地には無いのだらうかと思ひます。それから「わやく」といふやうな言葉もあります。「いたづらな子供」といふところを「わやくな子供」などと言ひます。ふるさとの言葉は戀ひしい。それを聞くと、父さんは自分の子供の時分に歸つて行くやうな氣がします。お前達の祖父さんでも、祖母さんでも、みんなその言葉の中に生きていらつしやるやうな氣がします。

（藤村讀本　二）

生馬の眼を拔くくらゐ。

藤村讀本
島崎藤村著、六卷、少年期から青年期に移り變る頃の人人の爲に編まれたもの、大正十五年(一九二六)二月刊行。

三 東京の言葉

吉村のお婆さんや小母さんは、よく父さんに言ひました。東京は生馬の眼でも拔かうといふくらゐのすばしこいところです。愚圖々々して居ては駄目です。第一、都會の人は物の言方からして違ひますよ、と。

ある時、小母さんはこんな風に東京の言葉といふものを父さんに說明してくれました。

「そりや、東京の人の話は『何』だけで通りますからね。『ちよいと、あの何を何して下さいな。』――『あの何ですか。』――それでお前さん、話がもうちやんと解つてしまふんですからね。」

(藤村讀本 二)

上田萬年
名古屋市の人、國語學者、文學博士、昭和十二年(一九三七)歿、年七十一。

自國語
恰も
同胞
響ふれば
精神的血液
國體
人種
維持す
標識

五 自國語

上田萬年

言語は之を話す人民に取りては、恰も其の血液が肉體上の同胞を示すが如く、精神上の同胞を示すものにして、之を物に譬ふれば、「日本語は日本人の精神的血液なり。」と言ふを得べし。日本の國體と日本の人種と、實に此の精神的血液を以て維持せられ、結合せらる。

言語は其の國民の標識となるのみならず、之と同時に、又一種の教育者卽ち情深き母ともなるなり。我等の生まるゝや、此の母は我等を其の膝の上に迎へ取り、懇に國民的思想と國民的感動とを教ふるなり。され

言ひつべし
終日
頑是なし
頑(頁)
嚴し
嚴(口)
紫雲英

ば、此の母の慈愛は誠に天日の如しと言ふべきなり。苟も此の國に生まれ此の國民たり此の國民の子孫たる者は、誰か此の光を仰がざるべき。

言語には、我等が心中に一日も忘れかぬる生活、殊に人生の神代とも言ひつべき小兒の頃の記念が結合せられ居るものと知るべし。我等が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てて、すや〳〵と眠に就かんとする折、母君は如何に優しき聲にて「寢よ。」との歌を歌ひ給ひしか。頑是なき子供心にわるふざけなどして遊び廻れる時、嚴しき父君は如何に嚴に教訓を垂れ給ひしか。さては、春の麗かなる野邊に友達と紫雲英などを摘歩き、或

餘念なし
反映す
反(又)
恩澤
恩(心)

は、秋の日赤き垣根の下に餘念なく栗の實を拾ひし其の當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に、えも言はれぬ快感を我等に與ふるなり。次には小・中學校の言葉、次には學生の言葉、或は市民としての言葉、或は職業により階級により地方によりての言葉など、皆それ〴〵の生活を其の上に反映す。故に、外國にて人となりしか、或は、外國人の學校にて外國語の教育のみ受けたる人ならざる限は、此の言語の恩澤を蒙り、此の言語に感謝の意を表せざる者はなかるべし。

されば、國民が其の國の言語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ず其の自國語を尊び、決して

措く
情
理

蔑にす
須臾
須(頁)
國語のため
二冊、上田萬年著、國語に就いての種種の研究論文をあつめたもの、第一冊は明治二十八年(一八九五)六月、第二冊は明治三十六年(一九〇三)六月刊行。

之を措きて他の國語を尊崇せず。情の上より自國語を愛し、理の上より其の保護・改良に從事し、以て眞正の國民を養成せんことを力む。凡そ何れの國を問はず、苟も國家的觀念の上より、其の國民の一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、先づ其の國の言語、次に其の國の歷史、此の二つを蔑にしては決して效を收むること能はず。これ國民たる者の須臾も忘るべからざることなり。

(國語のため)

小泉八雲
ラフカディオ・ヘルン、元英國人、ギリシヤのリユカディヤに生まれた、明治二十三年(一八九〇)來朝、後日本に歸化、明治三十七年(一九〇四)歿、年五十五。
透きとほる
紫紺色
異郷
異(田・七畫)
徐—除
富士
富士山、山梨・靜岡兩縣に跨がる、海拔三七七八米。
又なく
うるはしい
微—徴—徽

六曙の富士

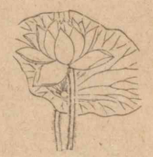
小泉八雲

日の出の少し前、曇りない四月の朝の透きとほる暗さをすかして、彼は再び故國の山を見た。黑い海の上に、紫紺色に聳え立つ遠く高い山嶺を見た。彼を長い異郷の旅から連歸つて來るこの汽船の後の方は、水平線が徐々に薔薇色の光で染められてゐた。

甲板の上には、もう若干の外人が、太平洋上の富士の又なくうるはしい初姿を見ようと待構へてゐた。

彼等は山脈の長いうねりを見つめた。そのぎざぎざした輪廓の向かふにはまだ星が微に瞬いてゐる。—

幻―幼　蓮華　一見する



――富士は見えない。

一人の船員は、問はれて答へた。

「あゝ、あなた方は眼のつけ所が低過ぎます。もつと上を御覽なさい。もつと高い所を。」

彼等は空の眞中近くまで眼を上げた。すると、曙の色で幻の蓮華の如く薄紅に染まつた偉大な山頂が見えた。その壯觀に打たれて彼等は沈默してしまつた。忽ち、萬年の雪は金色に變り、やがて、白色になつた。太陽の光が、地平線を飛越し、暗い山脈を飛越し、一見しては星の上までも飛越して、富士の頂を照らしたのであつた。

精

情緒

情（忄・心）

漠然と

節奏

節（竹・九畫）

小泉八雲全集

小泉八雲の英文の著作を翻譯したもの、全十八卷、大正十五年（一九二六）七月―昭和三年（一九二八）一月刊行。

やがて夜は全く明けはなれた。柔かな青い光は天空に漲り、總べての色彩は眠から覺めた。人々の眼前には、横濱の明かるい港が開けてゐた。さうして、麓は見えぬ神々しい峯が、雪の精のやうに大空に高く懸つてゐた。

異國にさすらつて來た彼の耳には、「あゝ、眼のつけ所が低過ぎる。もつと上を御覽なさい。もつと高い所を。」といふ聲がまだ響いてゐた。さうして、むく〳〵と押上げて來る情緒とともに漠然とした節奏をなしてゐるのであつた。

（小泉八雲全集に據る）

五十嵐　力
山形縣の人、國文學者、文學博士、早稲田大學教授、明治七年（一八七四）生。

山田
宇治山田市の中。

拜（手）

神々しさ
畏さ

五十鈴川
御裳濯川、伊勢の大神宮の神域を流れる。

嗽ぐ

幹（干）
千木・堅魚木

七伊勢參宮

五十嵐　力

俄に參宮を思ひ立ち、昨夜八時に東京を發つて、今朝の十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しさ、殊に内宮の畏さは言語に盡くせません。五十鈴川の清い流に水底の小鮎の數を讀みつゝ、恭しく嗽いで、それから、名も知らぬ鳥が、頭上の木の間に飛移つては奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔にさびた神杉の太い幹が、天を支へる柱の様に立並んでゐる間を辿つて、暫く進むと、やがて木立の奥、塀の彼方に、千木・堅魚木の金色が拜

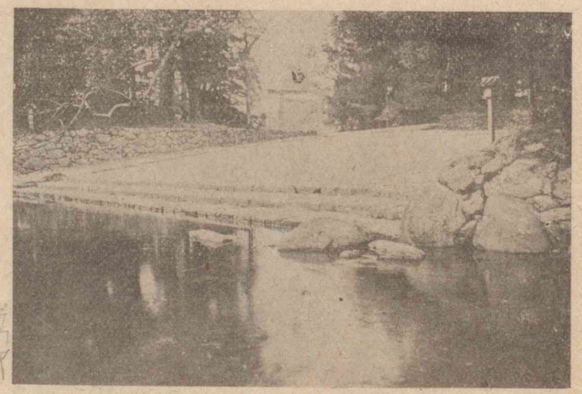
曳（目）

御白石

跪く
跪（足）

拍手

まれます。更に進んで塀の内に入ると、正面の御門には白布の垂幕が長く地に曳いて、靜かにそよ風に搖られ、その奥に、疎に立つた神杉に護られて、御白石のびつしりと敷きつめられた間に、神々しい白木の御宮が拜まれます。私はまづ御白幕の手前の石段の下に跪いて、小さい祈を捧げました。さうして傍に並んでゐた老翁・老婆が、拍手を打つては溜息まじ



五十鈴川

現

西行法師
俗名佐藤義清、歌僧、建久元年（一一九〇）寂、年七十三。

かたじけなさに
何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる。（西行法師の作と傳へる歌）

額づく
敬虔な
敬（攴・九畫）

たふと
單純
極度に

りに高聲の祈願を繰返すのに聞入りながら、現の間に、西行法師がかたじけなさに涙をこぼして額づいた、小さい敬虔な姿を思ひ浮かべました。

御事はかしこしわれら神杉にみもすそ川に涙
おとすなり

嗽げ身すゝげといはぬばかりにぞすみ〳〵よ
する五十鈴川浪

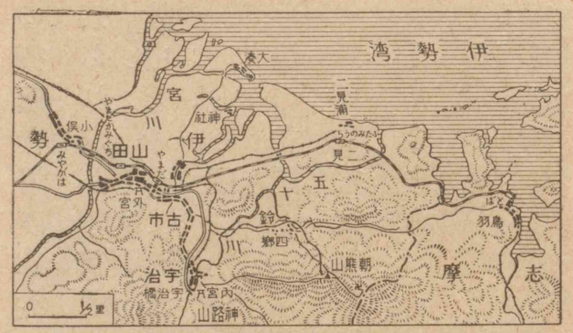
直き清き強き心をあらはしてすく〳〵立てり
たふと神杉

神宮は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したもののやうに拜まれます。さうして、この御社の神杉

笙

篳篥

幽寂な
幽（幺・六畫）
雅樂
雅（隹・四畫）
昭憲皇太后
御名美子、明治天皇の皇后、大正三年（一九一四）崩御、御年六十五。
めで
閲し食す
赤福餅
宇治山田市の名産。
五十九町
約六キロ半。



は、樹木の神々しさを極度に現したもののやうに思はれます。私どもは內宮の御後なる神杉の根方を一面に蔽うた苔の美しさに見とれつゝ、もと來た道を引返して、みたらし川に嗽ぎ、折しも聞ゆる笙・篳篥の幽寂な雅樂の音に送られて、この神境を辭しました。さうして、顧み〳〵宇治橋を渡つて、昭憲皇太后のめで聞し食したといふ赤福餅に腹をこしらへ、それから、車を命じて田圃路の五十九町を志

志摩　三重縣志摩郡。
朝熊岳　海拔五三四米。
神路山　內宮南方の山。
故由　大神宮儀式帳　或は內宮儀式帳ともいふ、伊勢大神宮の儀式行事を記して朝廷へ奉つた注進書、延曆二十三年（八〇四）勘進。
度會の國　今、三重縣度會郡一帶の地。
鞆

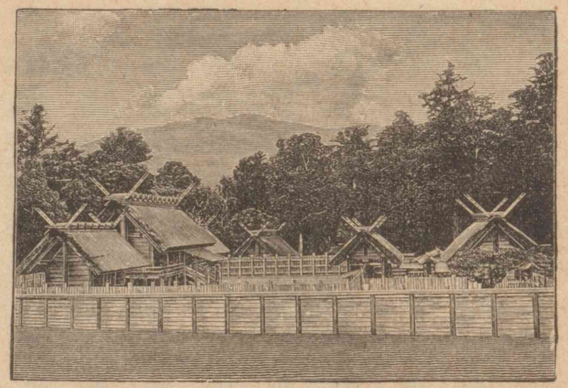
摩境の名山朝熊岳に走らせました。さうして、神路山の御蔭を浴び、御裳濯川の流に肥された田圃路を車に搖られながら、私はこの神境が大神の大御心に叶うた故由を考へました。『大神宮儀式帳』に、

度會の國は朝日の來向かふ國、夕日の來向かふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓・矢・鞆の音聞かぬ國と、大御心鎭ります國と、悅びたまひて、大宮定め奉りき。

とあるのを見れば、第一には山水の景色の類なさを愛でさせられたのであらう、第二には地勢・氣候・風土のうるはしさを愛でさせられたのであらう、第三にはこの

可能性
消極的煩累
煩（火）
率（玄）
見そなはす
饒舌

土地に永久なる平和の可能性のあることを愛でさせられたのであらう、最後には一切の消極的煩累にわづらはされずして、皇御孫に率ゐらるゝ大和民族の積極的・光明的の發展を見そなはすに都合のよい、心の落ちつく境と思はせられたのであらう、など考へつゝ、折々車夫の饒舌に氣を轉じてゐる中に、いつしか朝熊岳の麓につきました。朝熊岳は、天照大御



內宮

御杖代
倭姫命
第十一代垂仁天皇の第四皇女。
聖德太子
厩戸皇子、用明天皇の第二皇子、推古天皇の皇太子、推古天皇の二十九年（六二一）薨御、年四十九。
聖武天皇
第四十五代、天平勝寶八年（七五六）崩御、年五十六。
二千尺
一千尺は約三百メートル。
弘法大師
俗姓佐伯氏、號は空海、眞言宗の開祖、承和二年（八三五）寂、年六十二。
神さびる
二見
三重縣度會郡。
鳥羽
三重縣志摩郡、
水
五十嵐力著、五十嵐力集、第四書翰集、昭和四年（一九二九）五月刊行。

神の御杖代として、神路山・五十鈴川の神境を定め給うた倭姫命の御心にかなつて、屢訪ひ登らせられ、遂にこの山にて終らせられたといふ尊い歴史のある名山、昔から兩宮の參拜を表參宮と呼び、朝熊の登山を裏參宮と呼んで、この山に詣でぬを片參宮といつた程の由緒のある名山、聖德太子・聖武天皇・弘法大師、その他の聖達の靈跡に神さびた名山、わづか二千尺の高さながら五六千尺以上の高山の面影を具へた名山であります。

明日は早く奥院に詣で、午後は下山して二見に參り、それから鳥羽の島廻りをして、兩三日中に歸京いたします。さやうなら。

（水・莖）

荻原井泉水
名は藤吉、東京市の人、俳人、明治十七年（一八八四）生。

猿澤の池
興福寺五重塔南下の池。

老いてる
ざわめき

ベンチ
「共同腰掛」の意、英語。

八 新 緑

荻原井泉水

奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。櫻の頃に來た時にはまだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、いきゝと青んで、鹿が其の上に寢ころんだり、又、その青い芽をたべたりしてゐた。

猿澤の池の柳は、萌黄色をした其の若々しい美しさが稍老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ水に映つてゐた。春によく來る團體の客のざわめきも今はなくて、池の緣にあるベンチには、木蔭を求めて子供を遊ばせてゐる女がゐるばかりだつた。

荒池のほとりはなほ靜かだつた。奈良ホテルに沿うて葉櫻のほの暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。池には、稍遠くの興福寺の塔の影が映つてゐた。其の水に石を投げて、水の輪が出來るのに興じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつて、それが消えてゆくのを待つては、他の子供が又石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處では、園丁が其の枝をおろしてゐた。芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて來て香を嗅いでゐた。

若草山・高圓山がそれ〴〵にこんもりとして輝いてゐた。高畑のからりとした芝生の上には、大きな花が

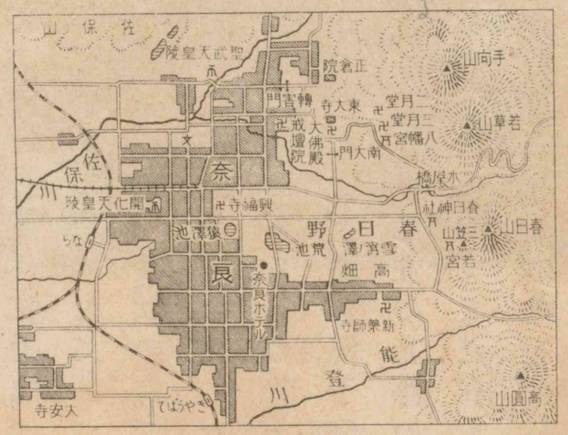
荒池　興福寺の東南方にある池。
奈良ホテル　荒池の南にある、鐵道省直營の旅館。
興福寺　奈良市の中央にある、法相宗の大本山、藤原鎌足の創建、藤原氏の氏寺。
園丁　園(ヰ)
枝をおろす
若草山　奈良市街の東北にある。全山芝生に覆はれてゐる、海拔三四二米。
高圓山　奈良市街の東南、春日山の南にある、海拔四六二米。
高畑　春日野の南方の低地、あせびの名所。

あせびの花

すがれる

春日の社　春日神社のこと、官幣大社、武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣命を祀る。

爪—瓜



咲いたやうに美しい洋傘が動いてゐた

あせびの花は大抵すがれてゐたが、其の花の多い谷のやうになつた路には美しい影が出來て、こまかく洩れてひそんでゐる光の戯も面白かつた。

春日の社に近い杉の木立は夏らしく黑み渡つて、その葉の先から愛らしい淺緑の爪のやうな若葉が出てゐた。參詣の人の多く通る道

轉害門

猿澤の池

煎餅
煎(ハ・火)
せびる
背—脊
文字通り
鹿子斑
鹿(鹿)
斑(文)
斑—班
南大門
東大寺の總門。

には鹿が澤山待受けてゐた。私は煎餅を手に持つてゐるだけ皆與へてしまつたが、彼等は圓々としたかはいゝ眼を私に向けて、いつ迄もせびるやうに蹤いて來た。一つの鹿は、私の前で首を上げたり下げたりした。それは御辭儀なのだつた。私は、私の前におとなしく脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫でてやつた。文字通り鹿子斑の其の肌はつや〳〵しかつた。五月は毛並の光澤の一番美しい時だといふ事である。抜代つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで、赤みを帶びて柔かさうだつた。手に握つてみると、其の赤い色の血のぬくみが感じられた。

大佛殿　東大寺の金堂、東大寺は華嚴宗の大本山。

戒壇院　東大寺に屬する堂宇、僧に戒を授けるための壇のある堂。

鴟尾　鴟（烏）

燦爛として　轉害門　東大寺の一門、天平（聖武天皇の御代、三九―四九）年間の創建のまゝといふ。

簡素　雄大な結構

南大門の通には燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間をすり拔けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土產物を並べてゐる店の軒についと飛入つたりしてゐた。

大佛殿を左へ、松林の間を行く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向かふに、實に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると大佛殿の屋上の鴟尾が金光燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじい〳〵と鳴きはじめてゐた。

轉害門は奈良に殘つてゐる建築のうちで最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構はす

はひる（はいる）

繪畫的に
築地

きんぽうげ

茶亭
木の芽
谿（谷・十畫）

楓

ばらしいものだと思つた。私は其の門をはひつて大佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿の若葉が日を照りかへしてゐたりした。古い寺院の土塀が、崩れた事によつて却つて繪畫的に見えるやうな、淋しいひつそりした道だつた。築地のすそにはきんぽうげが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。

若草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽の吸物を出した。若草山と春日山との間にある谿の道は、若葉の綠が顏にうつるやうな朗な感じの處だつた。爪先上りに苦しくないほどの登りになつて、山の奥に踏込んでゆく。洞の楓といふ名のついてゐる通りに、楓

亭

かまきり

芒

さすがに
亭（二）

觀音巡禮
荻原井泉水著、西國三十三所の觀音の巡禮紀行、昭和四年（一九二九）一月刊行。

がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤があちらにもこちらにも咲垂れてゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭のそれなどは大方すがれてしまつてゐるのに、こゝだけはまだふさ〳〵とした紫を垂れて美しかつた。

歩けばさすがに暑さをおぼえる。道に沿うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。青いかまきりの子が若い芒の葉先にとまつてふら〳〵してゐた。

（觀音巡禮）

長谷川二葉亭
名は辰之助、二葉亭四迷の號もある、愛知縣の人、文學者、明治四十二年（一九〇九）歿、年四十六。

けたゝましい
かぼそい
めいる
堪へる

九犬ころ

長谷川二葉亭

ふと目をさますと、きやん〳〵といふ聲がする。耳をすまして聽いて居ると、疑もなく小犬の啼聲だ。時時咽喉でも締められるやうに、けたゝましくきやんきやんと啼きたてる其の聲尻が、やがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い〳〵處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼きだして、くんくんと鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠をするやうな時もある。

僕は元來動物好きで、わけても犬は大好きだから、近

いたいけな

棄（ステ）（木）

處の犬は大抵知つてゐる。けれども、こんなかぼそい、いたいけな聲で啼くのは一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜著の中から首を出すと、

「どうしたの。寢られないのかえ。」

と、母が寢返りを打つてこちらを向いた。僕は此の返答はさしおいて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて何。」

「棄犬つて、誰かが棄てていつたのさ。」

鼾（鼻）

僕はしばらく考へて、

「誰が棄てていつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が犬を棄てていつたと、僕は二三度繰返して見たが分からない。

「どうして棄てていつたんだらう。」

「うるさいよ。」などといふ母ではない、何處までも相手になり、その意味を説明してくれて、「もう遲いから、默つてお寢。」と優しく言つて、又彼方を向いてしまつた。

僕も亦夜著を被つた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の鼾が耳に附く。

緣―椽

舐める

他愛もない

あわてる

寢られぬまゝに、夜著の中で、今聽いた母の説明を繰返し繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼犬が緣の下で兒を生んだとする。小さな、むく〳〵したのが重なり合つて、首をもたげて、みい〳〵と乳房を探してゐるところへ、親犬がよそから歸つて來て、その傍へどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろ〳〵舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくころ〳〵と轉がされる。轉がされては大騒して起き返り、又よち〳〵と這寄つて、ぽつちりと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く柔かな乳首を探り當て、あわててちうと吸附いて、小さな兩手で揉みたて〳〵吸出すと、甘い溫な乳汁がどくど

腋(肉)
產(生)
たうとう(とうとう)
つい。
銜む
銜(金)

くと出て來て咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。すると、腋の下から、まだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んでくる。とられまいとして、產毛の生えた腕を突張り、大騷をやつてみるが、たうとう取られて了ひ、そこらを尋ねて他の乳首に吸附く。其のうちにお腹も一杯になり、親の肌で身體も溫つて、融けさうな好い心持になり、ついうと〳〵となる、銜んだ乳首が脫けさうになる。夢心地にもあわてて又吸附いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なくうと〳〵となつて乳首が終に口を脫ける。脫けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。其の

足搔
領元
領(貢)
茫然と
濡れしよぼたれる

時、忽ち暗闇からもじや〳〵と毛の生えた、ふしくれだつた大きな腕がぬつと出て、正體なく寢入つて居るところをむずと引摑み、宙に吊す。驚いて目をぱつちり開け、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻搔くうちに、頭から何かで包まれた樣で、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが出られない。しばらく藻搔いて居るうちに、ふと足搔が自由になる。と、領元を摑まれて高い〳〵ところからどさりと落された。うろ〳〵してそこらを見廻すけれど、何だか變な、寂しい、眞暗なところで、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、恐

居たゝまらない

しく寒くなる。身慄ひ一つして、くん〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よちよち這出し、雨の夜半を唯ひとり溫な親の乳房を慕つて、悲しげに啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潛り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

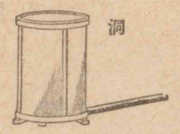
「お母さん〳〵、門の中へ這入つて來たやうだよ。」

と、僕が何だか居たゝまらないやうな氣になつて、又母に言懸けると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

澁々

雪洞



「出て見ようか。」

「出て見ないでもいゝよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ。あら、あんなに啼いてゐる。」

と、折柄絶入るやうに啼きさけぶ犬の聲に、僕は我知らずむつくり起き上つたが、何だか一人では怖いやうな氣がして、

「よう、お母さん行つて見よう、よう。」

「本當に仕樣がない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ〳〵、母も澁々起きて雪洞をつけて起き上つたから、僕も其の後について、玄關、と言つてもつい次の間だが、玄關へ出た。

履脱

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちらちらと靡く。その時、小さな鞠の様なものが、つと軒下を飛退いた様だつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外にさし、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照らし出した處を見ると、ついそこに生後まだ一箇月もたゝぬ、むく〳〵と太つた、赤ちやけた犬ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさうに掉立てて、此方を見上げてゐる。形は僕が寢て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫

かはいらしい
況や
じつと

をたらし、ぽつちりと兩の眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。

「おや〳〵、まあ、かはいらしい。」

と、母もつい言つてしまつた。況や僕は犬好きだ。じつとしては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつ、ちよつと呼んで見た。

するとさほど怖れた様子もなく、ちよこ〳〵と側へ來て、さすがに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる僕の手を下からぐい〳〵押上げるやうにして、ぺろぺろと舐めまはし、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い前足を擧げて、ばた〳〵やつてゐたが、果はやんは

りと痛まぬ程に小指を咬む。

僕はかはいくて〳〵たまらない。母の面を見上げながら、少し鼻聲を出しかけて、

「お母さん、何か遺つて。」

「遺るのもいゝけれど、居附いてしまふと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來てくれた。早速履脱に入れてこれを當てがふと、小犬は一寸香を嗅いで、すぐ甘さうに先づぴちや〳〵と舐めだしたが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしんくしんと小さな嚏をする。忽ち汁を舐めつくして今度は飯に掛つた。他に爭ふ兄弟も無いのに、頻りに小言を言ひながら、がつ〳〵とたべ出したが、飯はまだ喰ひなれぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉つて見るがそんな事ではなか〳〵取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな眞似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に僕は母と談判を始めて、今晩一晩泊めて遺つてと、雪洞を持つた手にぶら下る。母はちよつと澁つたが、もうかうなつては仕方がない。「お父さんに叱られるけれど。」と言ひながら、結局棧俵法師を搜して來て、履脱の隅に敷いてやつた。それは好かつたが、其の

顎(頁)

談判

棧俵法師

うんざりする

平凡

長谷川二葉亭著、小説、明治四十年（一九〇七）十月―同年十二月新聞紙上に發表せられたもの。

晩啼きとほされて、僕はちつとも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌な父は、泊めた其の夜を啼明かされてうんざりして了つて、翌日は是非追出すと言出したから、僕は小犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、其の中には小犬も獨寢（ヒトリネ）に慣れて夜も啼かなくなる。と、追出す筈の者に、何時しか「ポチ」といふ名まで附いて、妾が見えぬと、父までが一緒になつて捜すやうになつてしまつた。

（平凡）

小川未明

名は健作、新潟縣の人、童話作家、明治十五年（一八四二）生。

一〇 二つの世界

小川未明

小さな女生徒たちで、汽車の中はいつぱいでした。仲のいゝ同士が、あちらにかたまり、こちらにかたまり、お話をするもの、また雜誌を出してのぞき合ふもの、スケッチ帖をひらいて寫生するもの、それは、いろ〳〵でありました。

「小山さん。」

「宮本さん。」

あちらとこちらで呼合つて、手眞似（テマネ）で語り合つたかとおもふと、きやつ、きやつといつて笑ひこけてゐまし

溪（ケイ・水・十畫）

百合の花

た。

「ねえ、小野さん、あちらに見えるものなあに？」

「分からないわ。」

「新島さん、ちよつと雙眼鏡を貸してよ。」

「見えて？　こんどは私の番よ。」

「白いお家のやうなものよ。」

その時、汽車は山と山の間へはひりました。溪川が、ごう〳〵と音を立てて流れてゐます。

「百合の花が咲いててよ。あすこに咲いてゐるの、百合でせう。」

「まあ、いゝことね。」

絶えず。

はず。

高い山には、まだ雪が殘つてゐました。六月でしたけれど、やうやく新綠になりかけた木立もありました。世の中の塵埃に汚れない白い花や、紅い躑躅の花などが、崖の上や、流のふちに咲いてゐました。

みんなは、景色の變るたびに、窓からのぞいて喜び、はしやぎました。氣をつけて見るとこの同じ汽車の中に、もう一組の他の女生徒たちが乘つてゐました。服裝も質素で、その數も僅かに十人に足らなかつたのです。こちらの大勢の女生徒たちが、笑ひさゞめくのに反して、絶えずだまつてうつむいてゐました。それもそのはず、彼女たちは盲の女生徒だつたのです。

ちやうど
かうして

ちやうど、遠足にいゝ季節でありましたから、偶然二組の女生徒たちが、かうして同じ汽車に乘合はしたのであります。もとより學校もちがへば、行先もちがつてゐたのでありませう。

そんなら、なぜこの盲の女生徒たちは、だまつて下を向いてゐたか？　それは眼のあいてゐる女生徒たちが、面白さうに話したり、笑つたりしてゐるのをきいてゐたのでした。そして、その話の中から、また笑の中から、騒いでゐる様子から、何か自分たちにも分かる面白い外の世界を知らうとしてゐたのです。しかし、白い雪の殘つてゐる高い山も、紅い花も、岩から迸る泉も、青

いたづらに

い空の色も、不幸な彼女たちには、分かるはずがありませんでした。たゞいたづらに、じつとして、耳をすましてゐるにすぎませんでした。

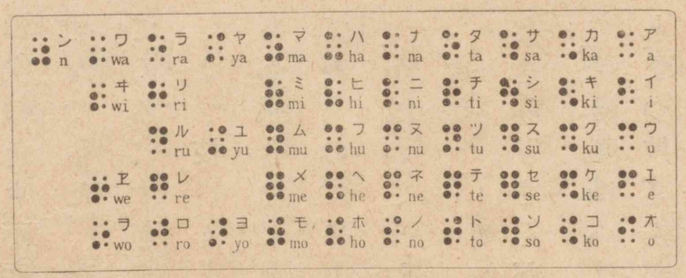
まつ枝さんと、きみ子さんは、さつきから盲の生徒たちが乘合はしたのに氣がついて、それとなく様子を見てゐたのであります。

「かはいさうね。なんにも見えなかつたら、どんなでせう？」

と、きみ子さんがいひました。

「だからあゝして笑ひもしないで、默つてゐるのだわ。」

と、まつ枝さんがさゝやきました。二人は、どうしてあ



点字

の人達は盲になつたのだらうかと、心の中で思つてゐました。

盲の女生徒の中に、縞柄から色合まで同じ著物をきた二人がありました。或は姉妹であつたかもしれません。眼のあいてゐる女生徒の中で自分たちを見てゐるものがあらうとは、知るわけがなかつたのです。二人は、親しさうに、手をとり合つたり、見えない瞼をふるはせて、にこにこと笑つたりしてゐました。

点字
点(黒)
ほゝゑむ

そのうちに、一人は懐から手紙を出しました。盲ですから、普通の文字が書いてあるのでありません。その手紙は点字なのでありました。彼女は、指先で一字一字讀んでは、樂しさうにほゝゑんでゐましたが、讀終るとこれを隣の一人に渡しました。彼女はまた指先

古家新筆

で讀んで行くうちに、手紙には、何が書いてあるのか、面白さうに、にこ〳〵と笑ひました。いつしか、二人は、一緒に指先でその手紙を探つて、聲を立てて笑つたのであります。

「どんな面白いことが書いてあるんでせう？」

思はず、まつ枝さんときみ子さんは、顏を見合つて笑ひ、頭をのばして、點字の手紙をのぞいて見ました。けれど、盲の女生徒たちが明かるい世界のことが分からない様に、分からなかつたのです。

大勢の女生徒たちは、朗な聲で、歌をうたひはじめました。まつ枝さんも、きみ子さんも、みんなと一緒にな

氣配

喘ぐ

つてうたひました。そして、しばらく、盲の女生徒たちのことを忘れてしまつたのです。

ふと思ひ出して、盲の人達を見ると、彼女等はもう笑ふのをやめて、またもとの様に下を向いてじつとしてゐました。そして他の眼の見える女生徒たちが、歌つたり、騒いだりしてゐる氣配の中から、何か自分たちにも分かる面白いものを探してゐる様に見えました。

汽車は、ホツ、ホツと喘ぎながら、峠を上つてゐます。白樺の林があつて、木の幹が、さながら雪の様に白いのでした。

「あれが白樺の木よ。」

と、みんなは窓から頭を出しました。たちまち、汽車は、トンネルにはひつたのです。

「わーつ」と、急に暗くなつたので、みんなは聲をあげました。ガタン、ゴー、ゴーッといつて、ぢきに汽車は、暗い世界から、明かるい世界へ出てしまひました。

「しかし、いつもこんなに暗かつたら、どんなでせう？」と、まつ枝さんときみ子さんは、心から不幸な人達に同情しました。そして、二人は、この世の中にかうした不幸な人達があるのをしみ〴〵と知つただけでも、こんどの旅行はいゝ旅行であつたと思ひました。

（大阪朝日新聞）

大阪朝日新聞
本課は昭和七年（一九三二）六月十九日刊行のものに據つた。

野上彌生子
本名八重子、野上豐一郎の夫人、小説家、評論家、明治十八年（一八八五）生。

二 飼ひもの

野上彌生子

臺所の棚の隅に、うす黑い布巾（フキン）のやうなものをくしやくしやに丸めてあるのが、目に入つた。お膳布巾（ゼンフキン）の古いのでも突込んであるのだと思つたので、

「布巾をこんなところに置いてはいけないね。」

といふと、女中が、

「それは、布巾ではございません。中のおぼつちやまが、猫の洗濯をなすつたのです。」

と答へた。變なことをいふと思ひながらつまみ上げて見ると、なるほど猫であつた。白天鵞絨（ビロード）で拵（コシラ）へた猫

の皮であつた。廣げると、丁度實物の猫の皮を開いた時のやうに腹で割かれ、四隅には四つの脚がついてをり、首の上に鼻と口とを形づくつてゐる赤い絹絲は色が褪せてゐた。尻つぽはと見ると、これは小指ほどの長さのものが綿の入つたまゝ、胴とは別になつてそばに轉がつてゐた。

よく聞いて見ると、昨日の日曜日に、Mが、おもちやの天鵞絨の猫があまり汚れてゐるから洗濯してやるといつて、中の詰物を引張出し、流しで石鹼をつけて一所懸命に洗つたのださうである。Mちやんの猫の洗濯といふことが、それ以來家中の笑ひ話になつた。

小鰕

蠶

栗鼠

蒐集

玻璃

玻(玉)

この小學生はあらゆるものを飼ひたがる。今飼つてゐるものを擧げると左の通りである。

小鰕一匹、蟻三匹、金魚十尾、栗鼠二匹、子犬一匹。この中金魚以下の三種は兄弟の共有である。それから蠶七匹、蚤一匹、蛙の子四匹、蛤一つ。

これ等の奇妙な蒐集のうちで、適當な棲家を貰つてゐるのは玻璃鉢の金魚と、金網のついた箱の中の栗鼠と、小さい犬小屋をもつてゐる子犬くらゐなもので、他はその雜多な組合はせに相當した變な容物の中に收容されてゐる。

小鰕と蛤とは小さいフラスコの中に、蟻はマッチの

抽きんでる

空箱の中に、蠶はカステラの箱に、蚤は藥の小罎に、最後の蛙の子は大きな空樽の中に入れられて、子供部屋の、お父様からお讓りの大きな卓子の下に持込まれてゐる。この蛙は、植物園の池でお玉じやくしからやつと蛙になつたばかりのところを苦心して捕らへて來たのだから、最も大事な記念物である。同時に彼は、空樽が蛙たちに取つて故郷の池と變らない樂しい場所となるやうに工夫を凝らした。彼は樽に水を湛へ、底に泥を敷き、その中に二つの石を岩の如く水から抽きんでさせ、間に草まで植ゑた。これは泳に疲れた蛙を休息させるためであつた。

お八つ

餌だけには少し困つた。理科の教科書は、蛙が水中の小動物を食物としてゐることを彼に教へた。併し、池中にゐるやうな小動物が新しい空樽の中に急に發生する筈はなかつたので、彼はビスケットやお煎餅のかけらで、我慢して貰ふことにした。本當をいふと、お八つに戴くすべてのお菓子が蛙の餌であつた。卓子の前の椅子に腰かけ、お盆の上で自分を待つてゐる毎日の樂しみなお八つを食べる時には、彼の兩足は、いゝ足臺のつもりできつと蛙の樽の上に載つてゐる。さうして、同じお八つ仲間の兄弟達と、饒舌つたり笑つたりする度に、盛に口から飛散る菓子のかけらは、悉く下

好奇心

生物學

過程

の蛙の樽の中にこぼれ込むから。

Mがこの蛙の子を大事がるのは、生きものを珍しがる子供の性來の好奇心と愛情とにもとづくのは勿論であるが、それでも子犬や栗鼠や金魚などに對するのとは別な、一種生物學的の興味がそこに働いてゐる。蟻や蚕を飼つてゐるのも同じ意味である。彼は蛙の現在の黑い上衣が、どんな過程を取つていつどんな色に變色するか、それを觀察したかつたのである。

栗鼠

彼は學校から歸つて來ると、毎日新な期待をもつて、何より先に樽をのぞきこむ。帽子も脱がず、鞄も上靴

しよつた（せおつた）

桑の葉

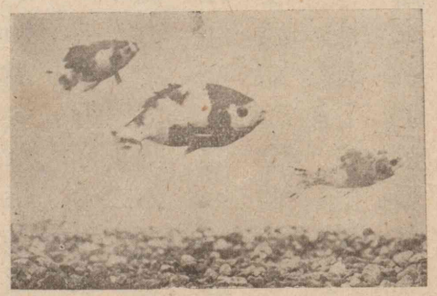
郊外

郊（阝右・邑）

所有權

行使法

袋もしよつたまゝである。この時、彼のポケットには、ハンカチや、鼻紙や、白チョークの破片などと一緒になつて、桑の葉が一杯詰めこまれてある。家には桑の木がないので、彼は自分の七匹の蠶のために、郊外から通ふ友達に頼んで、毎日新しい桑の葉を摘んで來て貰ふのである。栗鼠や金魚の如き共有物は、世話も兄弟お互で助け合つてゐるが、自分のと極つたものだけは、子供仲間の、所有權に對する最も原始的な、それだけ恐しく嚴正な行使



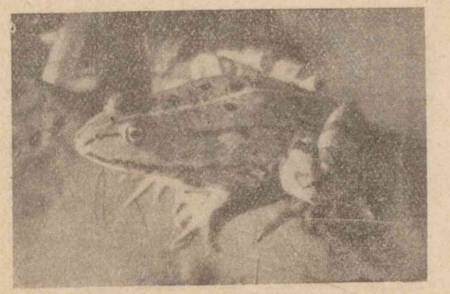
金魚

田端　東京市瀧野川區。
谷中　同市下谷區。

胡桃

胡桃

法によつて、自分でことごとく面倒を見なければならなかつた。日曜日になつて、貰ひためた桑の葉を使ひきつてゐるのが分かつた時などは一騒であつた。彼は近くの田端の臺や、谷中の森の方まで桑の木を探しに行かなければならない。併し、それほど手數のかゝる蠶でも、そのうちにだん〳〵成長した蛙に比べれば、まだしも始末がよかつた。



蛙

蛙は、いつまでも樽の底におとなしくしてはゐなかつた。手足が伸び、胡桃形の胴ががつちり締つて來る

ばね仕掛の玩具

足場

索牽

入學試驗お伴の記　野上彌生子著、教育に關する評論及び隨筆集、昭和八年（一九三三）刊行。

と共に、飛躍力も増大した。彼等は水からつき出た岩を足場にして、ばね仕掛の玩具のやうにぴよん〳〵樽の外へ飛出した。學校から歸つた小學生は、或日、樽の中に蛙が一匹もゐなくなつてゐるのを見て吃驚した。彼は卓子の後に這ひこんだり、書棚をのけて見たり、大捜索の末、やつと三匹のいたづら者を、それ〴〵の隱れ場所から發見した。一度は一匹の蛙が、どうしても見つからなかつた。卓子の前の窓から庭へ飛出したのだといふことになつた。明けの日の朝、彼等が自分達の蚊帳を疊んでゐると、驚くべきことには、迷子の蛙が蚊帳の中から飛出して來たのである。

（入學試驗お伴の記）

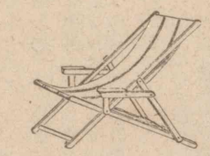
吉村冬彦
本名は寺田寅彦
高知縣の人、物理學者、理學博士、東京帝國大學教授、昭和十年(一九三五)卒、年五十八。

竹製の涼み臺

一三 涼み臺

吉村冬彦

毎年夏になつて、そろ〳〵夕方の風が戀ひしい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを付ける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふことが、誰がの口から言出される。しかし、其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々のことに紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の内にいよいよ今日はと言ふことになつて、朝の内に物置の屋


折疊椅子

黴(黴)
丁寧に

根裏から臺が取下され、一年中の塵埃や黴がぬれ雑巾で丁寧に拭ひ清められ、それから、裏庭の日陰で乾かされる。そして、いよ〳〵夕方になつてから中庭に持出されると、それで、始めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、同時に、折疊椅子が三つ並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明かるい宵の内には、縄飛をする者もあれば、寫生帖を出しておばあさんの後姿をかいてゐる者もある。明朝咲く朝顔の蕾を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、縁側へいろ〳〵なお花を並べて、花屋さんごつこをすることもある。暗く

お伽噺
お國
郷里
妖精國
幻像
家鴨

なると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんに「お國の話」をさせたりしてゐる。幼い子等には、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の妖精國のやうに、不思議な幻像に滿たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば、郷里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小船で連れに來るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それで、いつも「お國の話」をねだつてはおしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ。」と、一人がいふと、もう一人がおなじ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若

會津戰爭
明治元年(一八六八)會津であつた戰爭。
西南戰爭
明治十年(一八七七)西郷隆盛を擁した一黨が鹿兒島に兵をあげた時の戰爭。
淨化される
純化される

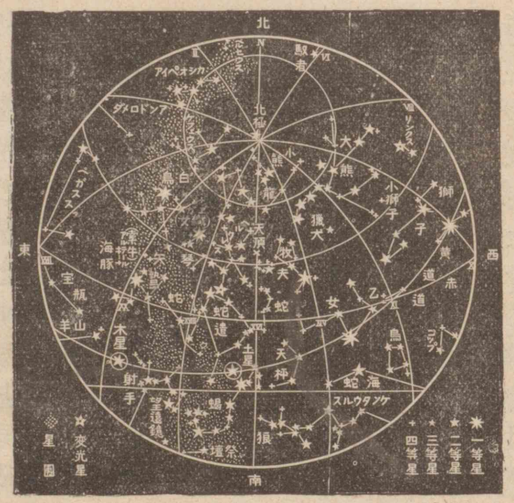
かつた頃の昔話も屢出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また、同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがもう遠い〳〵昔の出來ごとであつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見たことのない、或は朧げにしか覺えてゐない子供等には、會津戰爭や西南戰爭時代の昔話は、書物で見る古い歷史の斷片のやうにしか響かないだらう。そして、それだけに、却つて祖父に對するなつかしみは淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿に收められるだらうと思はれる。

黄道
黄(黄)
近刊
天文
あたる
處女宮
乙女座のこと。(次頁星座圖參照)
軌道

今年の夏の初に、涼み臺が持出されて間もなく、長男が、宵のうちに南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見ると、それは、黄道に近い所にあるし、ちら〳〵瞬きをしないから何れ遊星には違ひないと思つた。そして、近刊の天文の雜誌を調べて見ると、それが火星だといふことがすぐに分かつた。星座圖を出して來てあたつて見ると、それは處女宮の一等星スピカの少し東に居るといふことが分かつた。それで、其の圖のうへに鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日附を書いて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふこと

動機
動(力)
星宿
星(日)

にした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、とき〳〵星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃は、まだ織女や牽牛は宵の中にはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が屋根越しに氷のやうな光を投げてゐた。



七月の星座圖

諳—暗

莫大な
散布される
偶—遇—隅
譬—喩
譬(言)
盲龜浮木
一眼ノ龜ノ浮木ノ孔ニ値フガ如シ。(法華經)
孔—穴

空をながめてゐるうちに、とき〴〵流星が飛んだ。私は、流星の話をすると同時に、熱心な流星觀測者が、夜中、空を見張つてゐる話をして、それから所謂新星の發見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を諳記してゐれば、素人も新星を發見し得る機會はあるといふことも話した。

一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな、莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば釋迦の引いた譬喩の、盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮

光度

宇宙

木にぶつかる機會にも較べられるほど少さうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の出現は、それほど珍しいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。

こんな話よりも、子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふことであつた。我が家の先祖の誰かが、何處かで、どうかしてゐたと同じ時刻に、遠い〴〵宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世に、此の世界に屆くといふことであつた。

八月になつてから、雨天や曇天がしばらく續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經

天頂

つた。

ある朝、新聞を見てゐると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したといふ記事が出てゐた。其の日の夕方に涼み臺へ出て、子供とともに其の新星を搜したらすぐ分かつた。しばらく見なかつた間に季節が進んでゐることは、織女・牽牛が宵の内に眞上に來てゐるのでも知られた。そして、新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を爭ふほどに、輝きまたゝいてゐるのであつた。

「しばらく怠けたので、新星を發見し損つたね。」

といつたら、子供はどう思つたか、顏を眞赤にして、面白

冬彥集
寺田寅彥著、隨筆集、大正十二年(一九二三)一月刊行。

さうに笑つてゐた。

其の内にまた曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。從つて、星のことも、もう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は、これから始るので、學者達は、毎晩曇つた空を眺めて、晴間を待ちあかしてゐることであらう。

（冬彥集）

吉田絃二郎
名は源次郎、佐賀縣の人、小説家、隨筆家、明治十九年(一八八六)生。

野天
牽(牛)
教へる

一三七夕祭

吉田絃二郎

七夕祭は、田舍の子供にとつては樂しい年中行事の一つである。

夜毎に銀河が近くはつきりと見えるやうになつて來ると、子供たちの頭には、笹に吊した色紙が浮かんで來るのである。

野天のなかに焚かれてゐる風呂の中で、私たちは母親から牽牛星や、織女星を指さして教へられるのであつた。

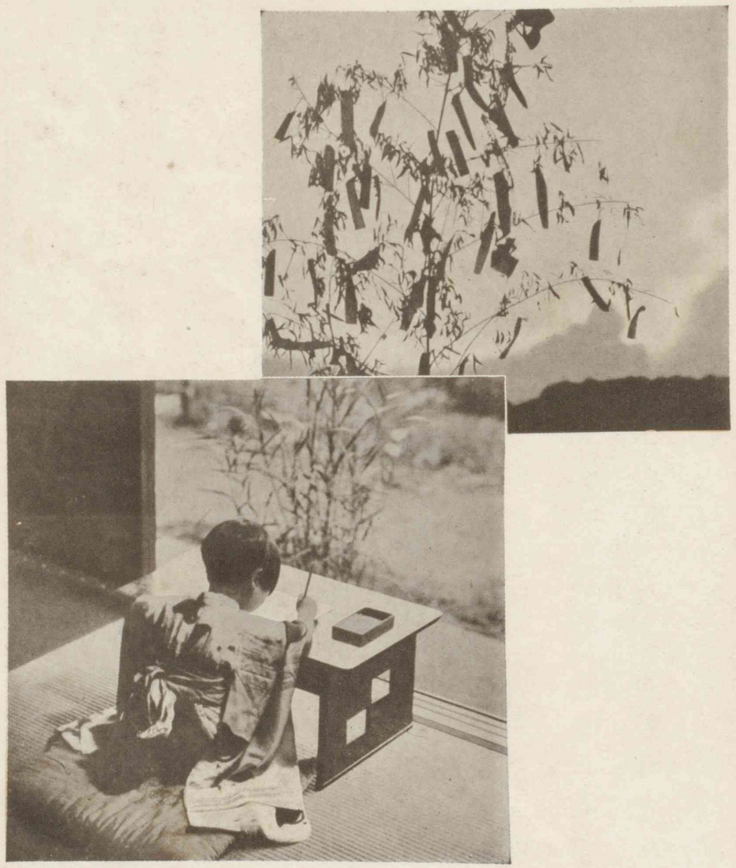
何といふ星であらうか、銀河から少し南西に寄つて

野天風呂

三角形を作つた星群がある。そして、頂點をなした中央の星だけが紅く見えるのである。

「眞中の星さまが紅いだらう。あれは左右の星さまを擔いでゐるからだ。右と左の星は秋の收穫だ。だから、豐年になればなるほど右と左の星が重くなるので、眞中の星さまの顏が紅くなる。」といふやうな母の話を、私たちは野天風呂の湯をばちやゝ〳〵させながら聽いたものであつた。

雨が一粒でも降れば天の川が溢れるので、牽牛星と織女星とは逢ふことが出來ないといふやうな話も聽かされた。



七夕祭

「かはいさうに、また雨が降つて來た。」と言つて、牽牛星や織女星の不運を悲しんでやる者もあつた。七夕の夜は全く雨になることが多かつた。

私たちは三日も四日も前から、紅・白・綠・黃・淺黃・青・黑などの色紙を買つて來て、短冊を拵へては、朝早く起きて、蓮や稻の葉の露を集めて墨を磨つて、短冊に字を書いた。六日の朝は、山から大きな男が笹竹を擔いで賣りに來るのであつた。他家の竹よりも自家の竹が大きくて丈が高いといふのが、子供心にもほこりであつた。

姉や妹たちは、五色の紙で著物を裁つて星にさゝげるのであつた。

磨—擦
子供心
裁(衣)

子供たちの身になると、七夕の宵に雨が降るといふことは、牽牛星や織女星のためよりも、むしろ自分等の七夕竿が濡れることのために悲しかつたのであつた。

私たちは雨に濡らすまいと思つて、七夕竿をどうかしようとする。親たちは、「雨が降つてゐても七夕さまは短冊を見て下さるから……」と言つて、私たちの手をとめた。雨は大抵嵐をつれてゐたので、笹に結びつけられた色紙は茄子畑だの黍畑だのへ散つて行つた。

（小鳥の來る日）

黍（黍）

小鳥の來る日
吉田絃二郎著、感想文・抒情文を集めたもの、大正十一年（一九二二）五月刊行。

相馬御風
名は昌治、新潟縣の人、文學者、明治十六年（一五四三）生。

良寛
通稱榮藏、俗姓山本氏、越後國（新潟縣）の人、禪僧・歌人、天保二年（一四九一）寂、年七十四。

托鉢
托―託

たづねる

一四 良寛さま

相馬御風

一 良寛さまの習字

良寛さまはたいそう字が上手でした。昔から日本中に幾人もならぶ人がないほどに上手でした。

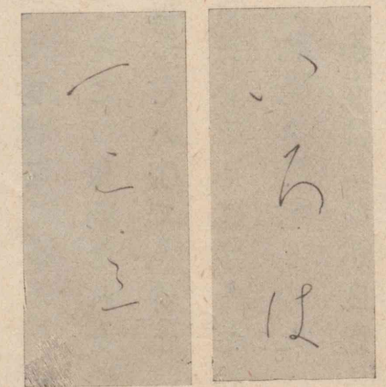
しかし、良寛さまは一生手習をやめませんでした。托鉢の途中で休んでゐる時なんかでも、良寛さまは棒切や指で、砂や土の上に、字を書いたり消したりして、習字をしました。

或人が良寛さまに習字のしかたをたづねますと、良

寛さまは、

「いゝお手本で一所懸命習ふがいゝ。それから、お手本を習ふ時には、お手本の字ばかりを見て、自分の手もとを見てはいけない。さうすれば、きつといゝ字が書ける。」

と教へました。



良寛筆蹟

それから又、良寛さまは、その人に空中習字と言ふことをも教へました。朝早く起きて口をすゝぎ、顏を洗つた後で、家の外に出る。そして、朝の空をながめる。朝の空をながめるのは氣持

のいゝものだ。そのいゝ氣持で、こんどは空に向かつて右の手をぐんと伸ばす。そして、空一ぱいに大きな字を書く。空はかぎりなく廣いから、どんな大きな字でも書ける。

そこで、毎朝それをつゞけるのだ。「一」といふ字でも、「神」と言ふ字でも、「佛」と言ふ字でも、何でも自分の一番書きたいと思ふ字を、毎朝早く起きて、何度も〳〵空一ぱいに大きく書くのだ。それが一等いゝ習字法だ。

かう言ふのが良寛さまの空中習字の法と言ふのでした。良寛さまは毎朝それを何十年もつゞけました。そして、あのやうにのび〳〵した立派な字が書けるや

うになりました。

二　父のかたみ

良寛さまのお父さんは、山本左門泰雄（サモンヤスタカ）と言つて、たいそう學問のあるえらい人でしたが、六十の年に京都でなくなりました。

良寛さまはそのお父さんの書いた掛物を壁にかけて、死ぬ日まで毎日々々それを拜んでゐました。それには、

朝ぎりに一段ひくし合歡（ねむ）の花　　以南（いなん）

と書いてありました。以南といふのは、良寛さまのお

えらい

水莖の跡ありし昔

添へる

發句

朝ぎりの大和物語にある歌。

父さんの別の名でした。良寛さまはその掛物の隅に小さく、

水莖の跡は涙にかすみけりありし昔のことを
おもへば

といふ歌を書添へました。それは、昔のことを思ふと涙が出て來て、懷かしいお父さんの字さへよく讀めないと言ふ意味です。

また、良寛さまはお父さんのその發句を讀んで、

朝ぎりの中に君ますものならばはるゝまにまにうれしからまし

と言ふ昔の人の詠んだ歌も書きました。

たらちねの

佐渡

新潟縣佐渡郡、新潟市の西方の海中に在る島。

それは、お父さんの發句にある朝霧の中に咲いてゐる合歡の花のやうに、若しお父さんも霧の中にかくれておいでになるのならば、霧がはれるにつれお父さんに逢ふことが出來て、どんなにうれしいことだらう、けれども、お父さんは霧の中においでになるのでなくて、死んでおしまひになつてゐるのだ。——かう言ふやうな悲しいおもひをあらはすために、書かれたのでした。良寛さまはそれほど孝心のふかい人でした。

また、良寛さまの歌に、

たらちねの母のみ國と朝夕に佐渡が島べをうち見つるかな

と言ふのがあります。良寛さまのお母さんは佐渡の國の人でした。此の歌はお母さんの亡くなつた後「ああ、あそこがお母さんのお生まれになつた佐渡が島だ、お母さんがもつと生きてゐてくだすつたら……」と言ふやうな悲しい氣持で、朝に晩に佐渡が島をながめては、亡くなつたお母さんをおもつてゐたと言ふことを詠んだのです。これだけを見ても、良寛さまがどんなにお母さんにも孝行であつたかと言ふことがよくわかります。

（良寛さま）

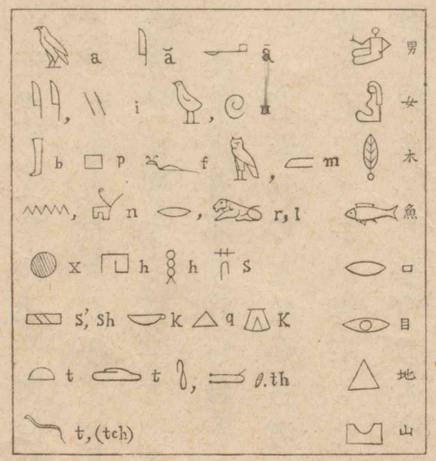
良寛さま
相馬御風著。良寛の行跡を童話風に書いたもの、昭和五年（一九三〇）五月刊行。

形體的

一五 文字

編者

文字は言語をうつす形體的の記號である。我々が心に思ふことを他人に傳へるのには言語で十分であるが、遠隔の地に傳へるとか、永久に保存するとかのためには、文字の力に依らなければならない。文字は言語の缺點を補ふために作られたものであつて、その人類の文化に與へた



埃及文字

黃帝
支那古代の天子、三皇の一人。

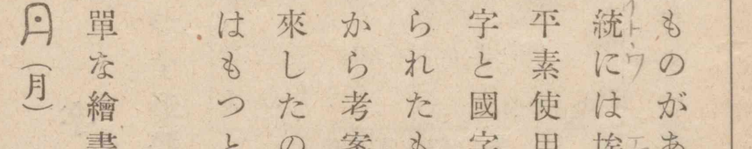
應神天皇
第十五代、紀元九七〇年崩御、御年百十一。

貢獻は實に偉大なものがある。

世界の文字の系統には埃及文字と支那文字との二大別があり、我々が平素使用してゐる文字は、支那文字の系統に屬する漢字と國字と假名との三種類である。

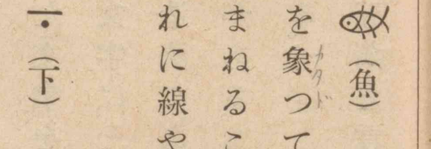
漢字は支那で作られたもので、黃帝の時代に蒼頡といふ者が鳥の足跡から考案したと傳へられてゐる。我が國に漢字が傳來したのは、應神天皇の御代だと記錄にはあるが、事實はもつと以前から傳へられてゐたものであらう。

漢字の最初は簡單な繪畫に近いものであつた。

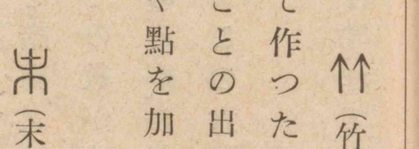


象形文字

指事文字



右の如く物の形を象つて作つたもので、これを象形文字といふ。形をまねることの出來ないものは、象形文字を本として、これに線や點を加減して工夫をこらした。



この樣にして作つた文字を指事文字といふ。以上の象形と指事とは漢字の作り方の基礎で、これを更に組合はせることによつて多くの文字が作られるのである。日と木とを組合はせて東の字とし、木を二つ組合はせて林の字を作る。人と言とで信の字とし、口と

會意文字

諧聲文字
形聲文字
諧—階—楷

轉注
假借
六書

鳥とで鳴の字とするやうに、文字の意味を合はせて新しい字としたものを會意文字といふ。又、文字を組合はせる時に一方からは意味をとり、一方からは音をとる場合もある。江・紅の字に於ける水・糸は意味を表し、工は音を表してゐる。鷄・鶴・鳩など皆これであつて、このやうにして出來た文字を諧聲又は形聲文字といふ。この方法で出來た文字は、その數が非常に多い。

以上は漢字の構造法であるが、この外に、使用法の上に轉注・假借の二法がある。この六つを合はせて漢字の六書と言つてゐる。

漢字の總數は約五萬と言はれてゐるが、我々が日常

畫
部首

構成

使用してゐるものは約五千位だと言ふ。けれども、我我はその全部の文字を知つてゐる譯でないから、知らない漢字にぶつかつた時には、辭書を引かなければならない。辭書を引くには、その字の畫と部首とを豫め知つて置く必要がある。

漢字は、すべて點(丶)と畫(一・丨・ノ・乀・乚・亅等)とから出來てゐる。從つて、すべての漢字はその點と畫との數を數へることが出來る。知といふ漢字は八畫であり、識といふ漢字は十九畫である。

漢字はその構成上、偏・旁・冠・脚・繞・垂・構の七つの部分から出來てゐる。偏は漢字の左の部分、旁は右の部分、冠

は上の部分、脚は下の部分、繞は繞つてゐる部分、垂は垂れてゐる部分、構は圍んでゐる部分をいふ。次にその例を示して見る。

坂・城・垣……土
針・鈴・銀……金　偏

封・射・對……寸
功・助・動……力　旁

守・官・家……宀
雪・雷・霞……雨　冠

照・煑・熱……灬
盆・盡・盤……皿　脚

延・建・廻……廴
近・追・道……辶　繞

床・店・座……广
病・疲・痛……疒　垂

國・圍・圖……口
閉・開・間……門　構

音訓

右の如き部分は、辭書によつて漢字を引く時の大切な著眼點であつて、これを部首といふ。部首によつてその漢字が如何なる部に屬するかを知り、次に部首を除いた殘りの畫數を數へて、その字を辭書の中から探し出すのである。

漢字には音と訓とがある。音は字音のことで、漢字本來の讀方であり、訓は字訓のことで、その字の示す國語の意味に從つた讀方である。草木をサウモクといへば音で讀んだのであり、クサキといへば訓で讀んだのである。

漢字の音には吳音・漢音・唐音・現代支那音の四種類が

ある。京都・行狀の京・行の類は吳音であり、京師・行爲の京・行は漢音であり、南京・行宮の京・行は唐音である。上海・漢口・芝罘などはいづれも現代の支那音である。吳音は我が國に最も早く傳はつた音で、佛敎に關する語に多く用ひられてゐる。漢音は遣唐使などによつて傳へられた音で、唐の文化と共に盛に我が國に用ひられ、漢字の音の中では最も多く用ひられてゐる。唐音は宋以後僧侶などによつて傳へられた音で、あまり多くは用ひられない。現代支那音は地名その他特殊なものにだけ用ひられてゐる。又、同じ漢音でも善惡・憎惡・音樂・苦樂の惡樂の文字のやうに、意味を異にするに

憎
惡

複—復—腹
け。ふ。
を。ぢ。
を。ば

從つて音の違ふこともある。

漢字の訓は漢字の持つてゐる意味に相當する國語を當てたものである。その當方は中々複雜である。山・海・鳥・獸・花・空のやうなのもあれば、今日・明日・叔父・叔母・海苔・香魚のやうなのもある。又、隧道・燐寸・煙草・莫大小・襯衣等のやうに西洋語を當てたのもあり、七夕・流石・五月蠅し等のやうに漢字と訓との關係のすぐには分からないものもある。又、同字に對して多くの異訓のある場合があり、多くの異字に對して同訓のある場合があつて、漢字と訓との關係は複雜である。

漢語の熟字は、音讀する時は二字とも音讀し、訓讀す

湯桶讀
重箱讀

片假名・平假名字源表

ア(阿)	イ(伊)	ウ(宇)	エ(江)	オ(於)	
あ(安)	い(以)	う(宇)	え(衣)	お(於)	
カ(加)	キ(幾)	ク(久)	ケ(介)	コ(己)	
か(加)	き(幾)	く(久)	け(計)	こ(己)	
サ(散)	シ(之)	ス(須)	セ(世)	ソ(曾)	
さ(左)	し(之)	す(寸)	せ(世)	そ(曾)	
タ(多)	チ(千)	ツ(州・川)	テ(天)	ト(止)	
た(太)	ち(知)	つ(州・川)	て(天)	と(止)	
ナ(奈)	ニ(二)	ヌ(奴)	ネ(禰)	ノ(乃)	
な(奈)	に(仁)	ぬ(奴)	ね(禰)	の(乃)	

る時は二字とも訓讀するのが常であるが、小僧・野宿・敷布・團子・役場のやうに一方を訓讀し一方を音讀するものもある。小僧・野宿・敷布のやうなのを湯桶讀と言ひ、團子・役場のやうなのを重箱讀と言つてゐる。

國字は漢字の構成法にならつて我が國で作つたもので、多くは會意文字で

ハ(八)	ヒ(比)	フ(不)	ヘ(部の旁ヨリ)	ホ(保)	
は(波)	ひ(比)	ふ(不)	へ(部の旁ヨリ)	ほ(保)	
マ(万)	ミ(三)	ム(牟)	メ(女)	モ(毛)	
ま(末)	み(美)	む(武)	め(女)	も(毛)	
ヤ(也)	○	ユ(由)	○	ヨ(與)	
や(也)	○	ゆ(由)	○	よ(與)	
ラ(良)	リ(利)	ル(流)	レ(禮)	ロ(呂)	
ら(良)	り(利)	る(留)	れ(禮)	ろ(呂)	
ワ(編ノ略ヨリ)	ヰ(井)	○	ヱ(慧)	ヲ(乎)	
わ(和)	ゐ(爲)	○	ゑ(惠)	を(遠)	
ン(ニノ假名レヨリ)					
ん(无)					

ある。辻・峠・裃・畠・凧・凪・俥・鰯・榊の如きものや、哩・吋・糎・粍・瓩・腺などはみなこれである。

假名は漢字の表してゐる意味を捨てて、その音だけを借りて國語を書き記したものである。假名の最初は萬葉假名であつて、阿伊宇江於や、あり(有)・なし(無)に蟻・梨の字を用ひる如

草書

空海
弘法大師、讃岐國（香川縣）の人、眞言宗の開祖、承和二年（四九五）寂、年六十二。

吉備眞備
奈良時代の漢文學者、右大臣、寶龜六年（四三五）歿、年八十二。

きがこれである。今の平假名・片假名はこれから發達したものであつて、平假名は草書の體を簡單にしたもの、片假名は偏・旁・冠など字畫の一部をとつて作つたものである。假名と漢字の相違は、漢字が言語の發音と意味とを表すに對して、假名は言語の發音だけを示して、決して意味を表さない點にある。この點で假名はローマ字と似た性質をもつてゐて、文字としては進歩したものである。平假名は空海、片假名は吉備眞備によつて作られたといふ言傳へがあるが、決して一人の手に成つたものではなく、平安朝の初期頃までに、誰が創めたといふことなしに自然に發達したものであら

摸倣性
獨創性

本質

う。漢字から假名を發明工夫したのは、ひとへに日本人の摸倣性と獨創性との調和によるもので、世界に誇るに足る事實である。

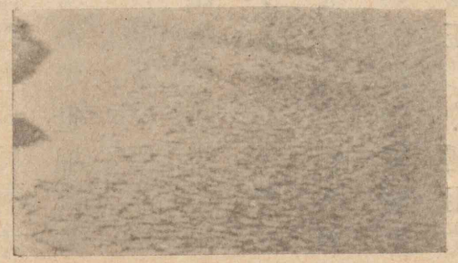
以上の如く、我が國の文字は數と用法とに於て中々複雜であるから、これを改良しようといふ意見も起つて來るのであるが、長い歴史的の發展を經て來たものであるから、さう急には改變も出來ない。從つて、我々はその文字の本質をよく知つて、これを正しく活用することに努力すべきである。

山村暮鳥
本名土田八九十、詩人、群馬縣の人、大正十三年(一九二四)歿、年四十。

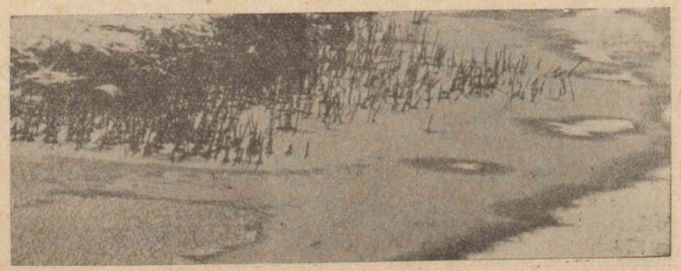
一六 なぎさ

山村暮鳥

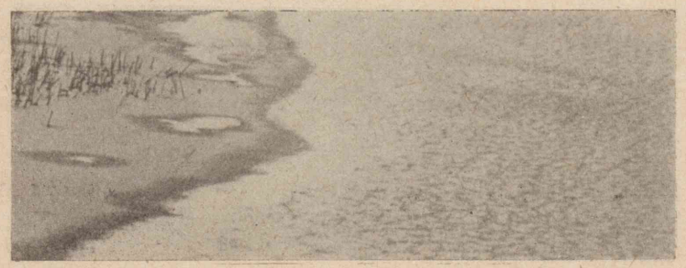
なぎさの砂は
ふるひにかけたやうにきれいだ。
だれもゐない
砂の上には、
小さな水鳥の足跡がある、
それがとほくまで
ならべたやうにつゞいてゐる。



その足跡をふんで、
これもまた、
かはいゝあかんぼの足跡がある。
きつと、
その水鳥をつかまへようとでも思つて、
よたよたと出かけたのかもしれない。
だが、水鳥とあかんぼ、



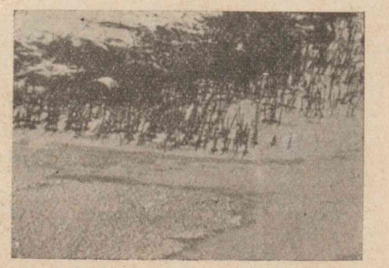
それだけか。
それだけといふことがあらうか。
よく見まはすと、
おう、そこに
すこしはなれたところに、
これもはだしの足跡があつた。
あかんぼをきづかつて、



あとからしづかに追ひかけた、
それこそ
そのあかんぼの
わかい母親のであらう。
にこにこした顔までがみえるやうだ。

（暮鳥詩集）

暮鳥詩集
山村暮鳥の詩集、昭和三年（三五八）三月刊行。



落合直文
宮城縣の人、國文學者、歌人、明治三十六年（一九〇三）歿、年四十三。

緋緘
ばや
時雨

北原白秋
名は隆吉、福岡縣の人、歌人、詩人、明治十八年（一八八五）生。

金龍山淺草寺
東京市淺草區淺草公園にある、淺草觀音として名高い。

一七 現代短歌抄

落合直文

緋緘のよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞ思ふ山ざくら花

大かたは掘りくづしたる貝塚の貝をぬらしてふる時雨かな

馬屋のうちに馬のもの食ふその音もかすかにきこゆ夜や更けぬらむ

北原白秋

金龍山淺草寺の朱き山門の雪まつしろに霽れにけるかも。

素足
素（糸）
秀

石川啄木
名は一、岩手縣の人、歌人、明治四十五年（一九〇七）歿、年二十八。

訛

馬鈴薯

夏淺み朝草刈のわらべらが素足にからむ犬胡麻の花

枯れがれの唐黍の秀に雀ゐてひようひようと遠し日の暮の風

石川啄木

たはむれに母を背負ひてそのあまり輕きに泣きて三歩あゆまず

ふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聽きにゆく

馬鈴薯のうすむらさきの花にふる雨を思へりみやこの雨に

金子薫園
名は雄太郎、東京市の人、歌人、明治九年（一八七六）生。

草市

蓮葉やみそ萩かうし草々をぬらした雨がやみ空はは晴れて
折から長くつゞく草市の空あたり銀河があらはれてゐる

蓮の葉やみそ萩ぬらし雨すぎて銀河ながれぬ草市の上に

閑院の宮家
閑院宮家、宮邸は東京市麹町區にある。

閑院宮家の林を見れば木々はくれなゐの芽ざしあかるき閑院の宮家の林うぐひすの啼く

夜の雨にしめる線路の石だたみとほく照らして電車はきたる

吉植庄亮
千葉縣の人、歌人、農業を營む。明治十七年（一八八四）生。

汲みあげし釣瓶の水にさえざえし青き松葉もちりまじりたり

手桶

汲みて來し手桶ながらに飲ます水仔馬の腹に鳴りて滿ちつつ

若山牧水
名は繁、宮崎縣の人、歌人、昭和三年（一九二八）歿、年四十四。

摘草のにほひ殘れる指先をあらひてをれば野に月の出づ

飲む湯にも焚火のけむりにほひたる山家の冬の夕餉なりけり

松村英一
東京市の人、歌人、明治二十二年（一八八九）生。

若葉風夕しづまればいちじるく瀨の音ひびくふかき谷より

暇なきわれをさびしと思ひつつをさな兒の頭撫でて居にけり

正岡子規
名は常規、松山市の人、歌人、俳人、明治三十五年（一九〇二）歿、年三十六。

くれなゐの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

島木赤彦
本名久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年（一九二六）歿、年五十一。

中村憲吉
廣島縣の人、歌人、昭和九年（一九三四）歿、年四十六。

端居
とほくし見ゆ
秋づく
コスモス

瓶にさす藤の花房みじかければたたみの上にとどかざりけり

島木赤彦

山道に昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよりにけり

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも

中村憲吉

夏の土ふかく曇れりふところに蟬を鳴かせてわらべ行きたり

端居（ハシヰ）よりとほくし見ゆる倉間（くらあひ）のコスモスの搖れ秋づきにけり

土屋文明
群馬縣の人、歌人、明治二十三年（一八九〇）生。

おほ母

土田耕平
長野縣の人、歌人、明治二十八年（一八九五）生

草まくら

ひさびさにかへり來れる村の上に低く大きく月いでにけり

土屋文明

おほ母の家をわが家と住みつきてやすき子等かも月を見てゐる

桐の葉の廣きをしきて兒はすわり母をもともにすわらせにけり

土田耕平

草まくら旅にしあれば母の日を火鉢ながらに香たきてをり

枕べの障子にひびく波の音おもへば遠き旅の宿なり

中邨秋香
静岡縣の人、國學者、御歌所寄人、明治四十三年（一九一〇）歿、年七十。

樂翁
松平定信、磐城國（福島縣）白河城主、幕府の老中、文政十二年（一八二九）卒、年七十二。

田安
徳川宗武、松平定信の父。

類焼す
落首

一八歌話

中邨秋香

一 とりゐ坂

樂翁公、年十二にてなほ田安の邸におはせしころ、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼せしが、大火といふまでにもあらざりしかど、焼死せしもの多かりしかば、落首に、

この火事は人の命をとりゐ坂これより上のとがはないぜん

とありけるを、近侍の人々興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞給ひて、「余が詠まんには、

奥醫師
まゐらす
すまふ
怪我
顚動す
梅檀の二葉
梅檀

延享
櫻町天皇の年號。（一四〇四―一四〇八）

さはいはじ。とありければ、奥醫師の某、「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらするに、「言はじ、言はじ。」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我のことなり。』といふべきなり。」とあり。即ち、

この火事は人の命をとりゐ坂怪我のことなりとがはないぜん

となり。一句のことにて、一首の意味を全く顚動せしめ、過の已みがたきに出づるを明らかにせられしこと、まことに梅檀の二葉とぞいふべき。

二 あがたの宿

延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中處々の人家破

賀茂眞淵
國學者、歌人、遠江國（靜岡縣）の人、家を縣居と言つた、明和六年（一七六九）歿、年七十三。

席（巾）
狼藉なる
沈思
會釋す
餘談に及ぶ
野分
天明
光格天皇の年號、（一七八一―一八四九）火災はその八年にあつた。

損しけるあくる日、賀茂眞淵翁の許に門人某見舞に行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉なる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机に倚りて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな。」といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知り、顧みて會釋しつゝ餘談に及ばず、「この嵐にて歌出來ぬ。」とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿は荒れにけり月見に來よと誰にいはまし

三　燒野の原

天明の火災にて蘆庵が家危くなりし時、翁、人々に告

蘆庵
姓は小澤、尾張國（愛知縣）の人、歌人、享和元年（一八〇一）歿、年七十九。
鈔錄本
太秦
山城國（京都府）、今京都市右京區。
內裏
內（入）
炎上す
未明
玉しきの庭

げて、「他の品は皆燒きても苦しからず、たゞ書籍だけは一册も多く出し給はれ。」とて、自身も年來の鈔錄本を風呂敷包にし、これを負ひて、太秦のしるべの家に避けぬ。この火にて內裏も炎上せし由聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、內裏の燒跡を拜したてまつりて、

小澤蘆庵

けさ見れば燒野の原となりにけりこれやきのふの玉しきの庭

（新說歌がたり）

姉崎嘲風
名は正治、京都市の人、宗教學者、文學博士、東京帝國大學名譽教授、明治六年（一八七三）生。

塹壕
塹（土）
追うて

已—既
飛（飛）翔（羽）
あはれ

搜—探

一九 汝の母

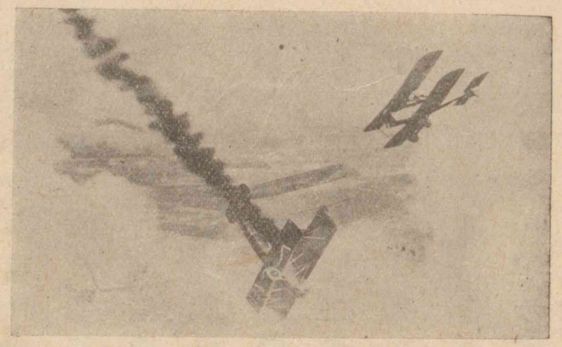
姉崎嘲風

英國の一飛行士官が敵の飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地上に落ちるのを見ると共に、それに乘組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕前であるにも拘らず、敵機の跡を追うて著陸した。敵機は翼を折つて壞れ、乘組士官は地上に横たはつて倒れ、呼吸は已に絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐたことをおもひ、あはれを覺えて、その死骸を片附けてやらうとして、胸のポケットの邊に手を觸れると、そこに堅い物がある。それを搜し出して見ると、一葉

一入
催す

武運めでたく

の寫眞で、それには「汝の母」と書いてある。即ち今戰死したドイツ士官は、空中戰にも常にポケットに「汝の母」の寫眞を藏してゐたのである。英國士官はこれを見て一入あはれを催し、まづ敵の死骸を味方の塹壕に運び、再び機上の人となつて又一戰した。かくて武運めでたく安全に味方の戰線の後に歸つた。



空中戰

その夜、英國士官は、その日射殺した敵とその老母と

感慨に堪へず
大略
母御

のことを思ひ、それにつけては、自分の身の上、且ははやく亡くなつた自分の母のことを考へて、感慨に堪へず、敵士官の住所・姓名によつて、その母へ一書を送つた。その意味は大略次のやうであつた。

「私は英國の飛行士官です。今日、私は敵機たるドイツの一飛行機を射落して、自分には一つの功名を立てましたが、その敵兵が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、その母御たるあなたにこの手紙を差出します。

私はあなたの御子息を殺しました。しかし、御子息を憎んでのことでもなければ、また御子息の

殘忍な
義—儀—議
偵察
無量の感

母御たるあなたのお悲しみを知らないでもないことは勿論です。たゞ戰爭といふ殘忍な仕事に於て、これは私の義務だつたのです。敵士官、即ちあなたの御子息が味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られましたなら、その結果、味方は必ずやそれだけの攻擊を受けて、味方の兵何人かの生命はそのために失はれたでせう。この不幸を防ぐため、私は敵機を射落しましたが、その乘組士官の死骸に敬意を表し、それを取片附けようとする時、その人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

いとし

悲痛

私は子供の時、母に死別れ、今でも母親のある人を羨ましく思ふのですが、その私が殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親がゐられ、死ぬ迄あなたの寫眞を抱いてゐられたのを見て、私はじつとしてゐられない感じがします。御子息は已にこの世の人ではありません。あなたもこの知らせを得て、今頃はさぞ悲痛に沈んでいらつしやるでせう。御子息を殺した私が、あなたに手紙を差上げるのは殘忍だとお思ひでせうが、しかし、私としては、あなたに對して、丁度自分の母に對するやうな親しい感じを、悲しみの中にも禁ずることが出來ません。私は御子息を殺しました。しかし、今私があなたの寫眞を前に置いて、あなたにこの手紙を書くときには、亡き御子息があなたに向かつて話をしてゐるのか、また、私が自分の亡き母に向かつて手紙を書いてゐるのか、わたくしには區別がつかず、筆先に涙がはら〳〵と流れるばかりです。

惡魔

私が御子息を殺したのは、戰爭といふ殘忍な惡魔のしたことです。あなたも、亦亡くなつたあなたの御子息も、このことを思うて、私の罪を許して下さるでせう。そしてまた、御子息の亡くなつた

顫—震
中立國

代りに、私は一人の母を得たやうな思をしてゐることを察して下さるでせう。今私の書くこの手紙は、御子息と私と二人の魂（感）——殺された御子息と、殺した私との眞心——が一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこの上は何も書けません。涙で目は曇り、筆（ペン）執る手も顫（ふる）へて書けません。」

この手紙は、英軍の本營から中立國（ちうりつこく）の手を經て、ドイツ國内の宛名の人に屆いた。一人の兒を失つた母がこれを讀んだ時の感じは、思ひやるさへ涙の種である。

さて、この婦人は數日の後、長い〳〵手紙を書いて、あの英國士官へ送つた。その大意は次のやうであつた。

述懷
却—反
蘇生

「お手紙の著く前に悴の戰死は知つてゐましたが、その戰死の相手たるあなたの情深いお手紙を見た時の私の思をお察し下さい。通常（つうじやう）ならば、あなたを悴の仇としてお怨み申すところですが、御述懷（じゆつくわい）に接しては、その仇が却つて悴の蘇生（そせい）となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが悴の懷にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたのお手紙は、私にとつては討死した悴の手紙としか思はれません。あなたは悴を殺したといはれ、また事實それに違ひないことは勿論知つ

畢竟
畢（田・六畫）

因緣

てゐますが、殺すも殺されるも、ともに各の祖國のためで、人としては何等の怨も仇もある理由のないことは、お互に明白のことでせう。その怨もないものが互に殺さうとするのは、畢竟（ヒッキャウ）は戰爭のためですが、これについては私は何も申しません。たゞ仇といふべきあなたが、私を母の如く思ひ、私にも亦、あなたが死んだ悴の身代りのやうに思はれるのは、何たる不思議な因緣（インエン）でせう。

私には三人の男子がありまして、戰死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戰場に出てゐて、いつ弟と同じ運命に陷るかわかりません。しか

光あれ
姉崎正治著、感想論文集、大正九年（一九二〇）五月刊行。

し、私は末子の戰死したために、あなたといふ新な子を得ました。戰爭が濟んで平和の時が來、そして、兄二人も無事に歸つて來ましたら、私はあなたにこの家へ一度來ていたゞきたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは死んだ悴とあなたと二人分の子として、弟として、私の家庭にいつまでも滯在（タイザ）していたゞきたうございます。私はその日の早く來るやうに神に祈つてゐます。」

そして、最後には、あの寫眞に書いてある通りに、「汝の母」と書いてあつた。

（光あれ）

大佛次郎
本名は野尻清彦、神奈川縣の人、小説家、明治三十年(一八九七)生。

エンヂン
發動機、英語。

プロペラ
推進機、英語。

轟音

二〇 空の紀行

大佛次郎

びゅーん……といふエンヂンの廻轉する音が、急に、宙に一杯になる。附近の青草が一度に根元から後に倒れて、迅く、細かく、わな〳〵顫へ出す。水になつて流れ出したやうな工合だ。翼の側に立つてゐた人の背廣の上著が跳ね上り、誰かのカン〳〵帽が見事に宙に飛ぶ。プロペラが凄じい勢で廻り出したのだ。K飛行士がちよつと手を擧げて合圖した。

聲はエンヂンの轟音に消されて全く聞えないが、萬歲を叫んでゐるらしい見送の人達の澤山な顏が、無數

人波

がす
濃霧の俗稱、英語ではない。

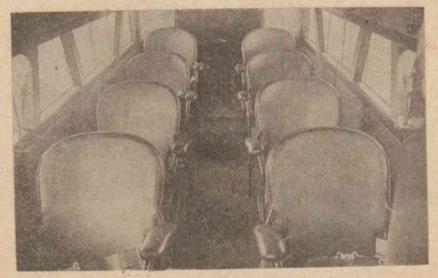
白夜

直覺

贅澤な
贅(貝・十一畫)

の手が、振る小旗が、窓硝子の面に流れて後方へ廻る。友人の顏が時々見える。僕等は目で合圖しあふ。その人波が全く切れたと思ふと、窓硝子の外はからつぽだつた。その朝の東京を罩めてゐた灰色の「がす」が、太陽の姿も見えない空を蔽つて、白夜のやうに灰色に濁つた宙である。

おや、昇つた！　といふよりも、直覺では、僕が深々と腰掛けてゐるスチンソン機の、贅澤な緋色の革張の座席の下で、地面の方が下へ靜かに退却して行つて、機だけが宙に残つた



飛行機の座席

捨身
度胸

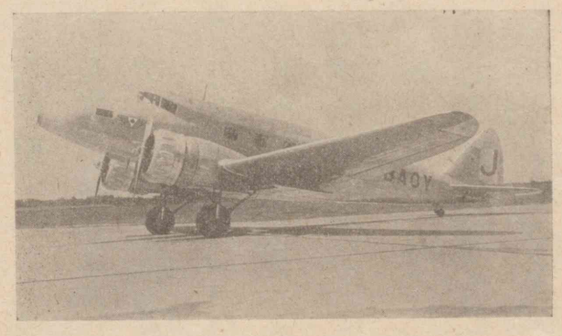
隅田川
荒川が東京市内を流れて東京灣に注ぐ部分の稱。

途端に
築地
東京市京橋區にある。

本願寺
西本願寺の別院。

クリスマス
耶蘇降誕祭、十二月二十五日に行はれる。

のだ。慌てて首を伸ばして下を見る。僕は捨身に近い度胸を据ゑてゐたので、どんな瞬間にも目を明けて見てゐる決心でゐた。

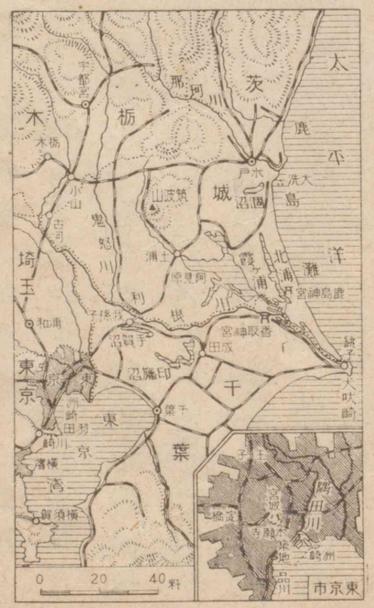


旅客機

大きく緩く地面が動いてゐる。掘割・埋立地、整然と居並んだ人家、隅田川の川幅と橋。「あいつは電車だ。」かう思つた途端に、築地の本願寺が、ずつと下に、クリスマスの裝飾菓子のやうに行儀よく置いてある。「小さいな。はゝあ、飛行機が高い處へ來てゐたのだ。」機は大川の川口の空を横切つて行く。水に浮いた無數の舟、河岸を走つてゐる蟲のやうな自動車、歩いてゐる人。

大川
隅田川の別稱。

おや、田圃がある。「をかしい。これは確に何處かで見た圖だ、始めてではない。」さうなのだ。新聞で見たいろいろの航空寫眞——驚かない筈だ。なるほど一應の概念だけは、今の新聞を見る人なら持つてゐる。かうし



緩慢に
慢―漫
スピード
速度、英語。

て實際に空を飛んでみなければ、あの種類の寫眞に出て來る町や人家の小さいことを、全然想像することが出來ない。

豆粒、といふよりも小さい。ポケットからピンセットを取出して、右の家と左の家とを輕く挾んで置換へる。そんな惡戯氣さへ誘ひ出されるくらゐ小さい。全部のものを載せてゐる地面が緩慢にあとずさりして行く。スピードの感覺など更にない。機は空に樂樂と浮いてゐるだけではないか。

「飛行機が來てゐる。」と、隣席に腰掛けてゐるM寫眞部長が注意してくれる。なるほど横手の宙にぽかんと

フィルム
寫眞機の感光膜、英語。

手賀沼
千葉縣の西北部にある、周回約三五粁。

印旛沼
千葉縣の北部にある、周回約七〇粁。

浮いてゐる。見送の飛行機だ。M氏は窓を明けて、活動撮影機の狙を附ける。僕も半分くらゐの大きさのフィルムを向ける。見る間にこちらの方が迅くなる。「やはり駛つてゐるんだなあ。」と納得する。

「手賀沼！」K氏がどなつてくれる。薄くなつた「がす」の底に沼が光つてゐる。思はず時計を見る。まだ飛翔後五分と經つてゐない。K氏は上體を廻して高度計を渡してくれる。僕は針を讀んで「手賀沼、六〇〇米。」と、悠々と手帳に書きこみ、地圖と相談する。地圖にある印旛沼を探すと、手賀沼の向かふに明かるく光つてゐる。その邊から行手一面の空には日が當つてゐ

JOAK
東京中央放送局。

筑波山
茨城縣にある、高さ約八七六米、山上は男體と女體との二峯に分かれてゐる。

霞ケ浦
茨城縣の南部にある、周回約一五〇粁。

洲崎
東京市深川區にある。

海軍の飛行機
霞ケ浦の西北の阿見原に海軍航空隊がある。

盤(皿)

るらしい。JOAKから今日の飛行は快晴を約束されてゐる。

「樂だなあ。」と、僕は左手にもう現れて來た筑波山の山塊を、自分が仙人になつたやうな心持で眺める。

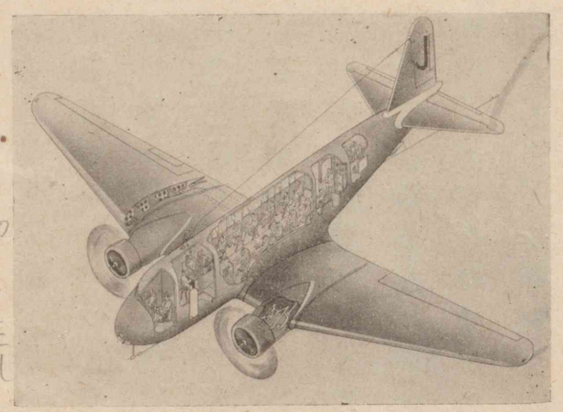
高度計は九〇〇米。霞ケ浦だ。洲崎から十分。海軍の飛行機が、明かるく日の當つてゐる水の上で、銀の蜻蛉のやうに、翅を休めたり飛上つたりしてゐる。沼の面も銀盤のやうに白く光つてゐる上に、蜻蛉も銀細工のもののやうに、動く度に翅がきら〳〵光る。

筑波は左側に在る。少し前まで横顔を見せてゐたものが、何時の間にか眞向かひの姿となつて、男體・女體

ガリヴァー
英國人スウィフト(西暦一六六七—一七四五)著の諷刺小説ガリヴァー旅行記の主人公、印度への航海中小人國に漂著したことがある。

箱庭

のはつきりと分かれた二つの峯も、山腹から上は薄い朝霧の中にあるのが、見てゐる内に後へ逃げて行くやうだ。



旅客機の内部

機の下にある麓の平野は朝の光に輝いてゐる。此の廣い眺望のうちに投込まれれば、山も野も小人島の景色になる。僕は雲の上に首の出てゐるガリヴァーだ。鶯色をして小切を綴り合はせたやうな畠、箱庭のやうな

村落、平野の上に縱横に線を引く道路。道路を走つてゐる自轉車が動く影となつて僅かに見える。歩いてゐる人間のシャツの色らしく光る白色の點、點。森のくつきりと黑い影。眺望は實に明かるい。高度計は一〇〇〇米。

K氏が無造作にハンドルを離して腰を浮かせ、背廣の上著を脱ぎにかゝる。操縱席に坐り直しながら、前方を見詰めて「水戸」といふ。大きな沼が見える。水は黑い。すぐその向かふの草野の上に、町が鼠色に廣がつてゐる。時計を見ると八時二十八分。高度はまた一〇〇米昇つて一一〇〇米。沼の上。八時二十九分。

ハンドル　把手、英語。

沼　潤沼（ひぬま）を指す。

水戸は沼からまだ遠い。それから一分、いよ〳〵水戸市外。周圍を道路で圍んだ池のやうな沼。すぐと町の上空だ。八時三十一分。高度はまた一〇〇米昇つて一二〇〇米。那珂川が海へ注いでゐるのが見える。海は鈍い銀色で、水平線は見えない。縣廳らしい何階もある四角い建物。玩具だ。電車が匐つてゐる道路。那珂川上空。川口の海に音のしない磯波が立つてゐる。松らしい林が海岸に並んでゐる。大洗だらう。

那珂川　栃木縣那須山に發し茨城縣に入り鹿島灘に注ぐ、長さ約一二六粁。

匐―匍

大洗　水戸市の東南約一四粁にある、海水浴場。

薄田泣菫　名は淳介、岡山縣の人、詩人、隨筆家、明治十年（一八七七）生。

懶い

窄（穴）

所在ない

三　秋の小天使

薄田泣菫

一

「ひん、かち。――ひん、かち。――ひん、かち。……」

閉て切つた障子に秋の陽が明かるくあたつてゐる午後三時過ぎ、懶さうな蟋蟀の歌に混つて、ふとこんな聲を私は聽きつけた。それは、誰もがひとりぼつちの心寂しい折に、われ知らず唇を窄めて吹く口笛のやうな、弱い、かすかな、所在なささうな聲だつた。

私はもしやと思つて、机の前を離れて、そつと障子を開けてみた。私は一目でその聲の主を見つけることが出來た。それは胡麻鹽の頭と金茶の胸毛と眞黑な翼とを持つた小鳥で、兩肩のあたりに眞白な差毛が際立つて光つてゐるので、まるで紋付羽織でも一著に及んでゐるやうな恰幅だ。

胡麻鹽

胡（肉）

差毛

一著に及ぶ

恰幅

鶺

「ひん、かち。――ひん、かち。――ひん、かち。――」

小鳥は長い旅に出てから半年振りに歸つて來たので、そこらの贔屓筋へその由を披露し、かねてまた、その間の御無沙汰を詫びてでもゐるやうに、その一節ごとにひよくり〳〵と、老人めいた胡麻鹽の頭を下げて、

贔屓筋

披露する

御無沙汰

こくめいに
しさす
尖鋭な
先驅者
先(凡)

こくめいにお辭儀を繰返してゐる。

「やつぱり鶲だつたな。彼奴もうやつて來てゐるのか。」

私は口の中で呟いた。この時、小鳥は初めて私の姿に氣づいたらしく、お辭儀を半分しさしたまゝ、眞黑な顏を傾げて、きよろ〳〵と私の方を見守つてゐる。

二

秋はその尖鋭な緊張し切つた氣力を、鶲の先驅者である鵙の、あの小英雄的な負けじ魂の中に植ゑつけてゐる。私が今年の秋初めて鵙の鳴聲を聽いたのは、九月の十三日だつた。それは朝のことで、あたりの立木

癇
颯爽たる
餘熱
潑剌たる
明徹な

の第一の梢で、元氣よく長い尻尾を振廻しながら「き、き、き、き……」と、癇の高い強い聲で高鳴きしてゐる颯爽たるこの鳥の姿を見た時には、その瞬間、そこらにごちやごちやと立ち並んでゐる工場の赤い屋根に、土塊のから〳〵に乾いた黍畑の畔に、牧場の番小屋に釣りつ放しの蚊帳に、素足で地べたに立つてゐる私の蹠に、まだそこばく殘つてゐた眞夏の汗臭い餘熱は一氣に跳ね飛ばされて、初秋の潑剌たる健かさと明徹な冷つこさとが、そこらにふりか

鵙

隱遁　隱(阝(左)・阜)

寂

芭蕉　松尾宗房、伊賀國(三重縣)の人、俳人、元祿七年(一六九四)歿、年五十一。

孤寂

かるやうに感じたものだ。

秋はまた閑寂と隱遁とを樂しむ心を鷦鷯のあのくすぼつた小さな胸のなかに產みつけてゐる。鷦鷯は鴫におくれて、木の葉がすつかり枯落ちた頃、こつそりとやつて來る孤獨者で、どんな場合でも彼は道連を伴なはない。「寂」の詩人芭蕉もさすがに秋の寂しさにはこらへきれないで、「こちら向けわれもさびしき秋のくれ。」といつたが、鷦鷯はその魂に沁透る孤寂が何よりも好物で、「自然」が嘘一つ

鷦鷯

陰濕な

人懷こい

愛嬌

愚直

愚(心)

渥丹色

豐穰

豐(豆)

しても、けし飛んで無くなりさうな小さな體で、絕えず寂をもとめて、陰濕な物陰をと搜し歩いてゐる。

この二つの小鳥に挾まれて、十月のなかば過ぎにひよつくりと訪れて來る鶺鴒こそは、日和續きのこの頃にふさはしい來客で、人懷こいこの鳥は、到るところで持前の愛嬌と愚直に近いまでの人の好さとを振撒いてゐる。この頃になると、そこらの木の實はそれ〴〵黃金色に、また渥丹色に熟み爛れ、草の實はふくらみきつた莢からおのづと爆ぜ割れて、そのはずみにぴち〳〵とかすかな音を立てて廣い外界へと飛出してゐる。どこを見ても豐穰と成熟と收穫との季節だ。

草庵

蜂は蜂で、正午前後のぽか〳〵と暖い頃を見はからつて、「もう一稼ぎだ。あとは長い休息だ。」と、元氣よく巣から飛出し、殘りの花に蜜を求め歩いて、頭のてつぺんを黄いろい花粉だらけにしてゐる。蓑蟲はまた早くから枯つ葉で縫綴くつた草庵のなかに隱遁生活を送つてゐたが、この二三日暖い上天氣が續くと、すつかり見限つてゐた世間の事々がまた思ひ出されるらしく、一旦閉て切つた草庵の小窓から眞黑な顏を出して、きよろ〳〵とあたりを

四十雀

座方
はしやぐ
ちよこまかと
こましやくれる
身のこなし
これ見よがしに

見廻してゐる。

程近い岡の上では四十雀が、輕業師の一座のやうに、大勢の小さい座方を引連れて來て、騷々しくはしやいでゐる。座方の小坊主連は、ちよこまかと、こましやくれた身のこなしで、そこらの立木の小枝につかまつては、てんでに習ひ覺えた得意の藝をこれ見よがしにおさらひをしてゐる。あるものはとんぼがへりを、あるものはまたぶらんこを、といつたやうに。

三

誰も彼もが氣忙しさうに動いてゐるなかへ、ひよつくりと歸つて來た鶺は、持前の人の好さから人家の垣

彈機
よし
戯（戈）
慇懃さ
慇（心）
伯父貴

根近くに紛れ込んで、

「ひん、かち。――ひん、かち。――」

と、低い調子で歌ひながら、金茶の胸當に紋附羽織の著附で、彈機細工か何かのやうに愛嬌たつぷりにぴよこぴよこと胡麻鹽の頭を下げどほしに下げてゐる。

相手が誰であらうと頓著なく、よしどんな害心をもつてゐる悪戯者に出會はさうとも、同じやうな心安さで挨拶せずにはおかない。この鳥の慇懃さを見て、世間の人々、わけても農民達は、

「彼奴、俺を見て、ぺこ〳〵お辭儀をしてくさる。伯父貴とでも思つてゐるのか知ら。馬鹿鶲だな。」

綽名
あさはか過ぎる
いた〳〵しい

と、こんな失禮な綽名をつけて、ともすればこの小鳥を馬鹿者扱にしようとする。だが、それは人間のあさはか過ぎるまちがひで、持つて生まれた人の好さから、世間はすべて善意に滿ちてゐて、誰一人害心を持つてゐるものがあらうなどとは思つてはゐない。この紋付羽織の小坊主は、誰彼の分け隔もなく友達づきあひに愛嬌を振撒いてゐるのだ。あの金茶色の胸毛に包まれた、小さな魂のいた〳〵しいまでの善良さを、少しでも傷つけるやうなことがあつては、人間にとつて大きな恥辱だと言はなければならない。

この鳥の性のよさを分からうとするには別にむづ

はづす

獨樂園
薄田泣菫著、隨筆集、昭和九年（三五九四）四月刊行。

かしいことは入らない。若しかこの鳥に出會つて、

「ひん、かち。――ひん、かち。――」

と胡麻鹽の頭を下げて挨拶をせられたら、その場をはづさず、こつちからもまた、

「ありがたう。――ありがたう。――」

とでも言つて、丁寧に頭を下げて挨拶を返してやることだ。といふと、大抵の人は笑に紛して、

「そんな馬鹿げたことが……」

と言ふにきまつてゐるが、人は自分自ら馬鹿になつてみなければ、愚直さやお人好のどんなに尊く有難いものだかといふことが解らう筈はないのだ。

（獨樂園）

若山牧水（二一一頁參照）

萩

坪谷村　宮崎縣東臼杵郡。

巍峨たる

取著き

彎曲する

彎（弓）

三　萩の原

若山牧水

私の生まれた家は、東と北とに山を負ひ、前に溪を控へた坪谷村字石原一番戸といふのであつた。溪を距てた向側は、また巍峨たる險山となつてゐる。その部落と東隣の部落との間には、少しの間人家が斷えてゐて、和田越といふ小さな峠を越して來ると、先づ私の家が取著きとなり、そのまゝ溪に沿うて、疎に西へ細長く總戸數二十二戸かある石原村となるのであつた。西の方から白々と瀧のやうな長い瀨になつて流れて來たその溪は、丁度私の家の眞下で大きく彎曲して、そこ

背戸口
一區劃
克明に
克(凡)
灌木林

だけ深い淵となつてゐた。二階からはその大きな淵が一面に見下されて、月の夜などは特に好かつた。

家の背戸口からすぐまた他の小徑(ミチ)がついてゐて、背後の小山を越すやうになつてゐた。それを越すと、そこにはまた別の溪が流れてゐて、それからそれと、幾つとなく折れ重なつてゐる小さな山脈の間に、その溪谷だけの流域ともいふべき比較的平かな一區劃(クカク)が出來てゐた。元來が極めて平地に乏しい山地のことで、その溪の兩側など、かなり克明(コクメイ)に手を著(ソ)けて、小さいなりの田なり畑なりに開墾せられてあつたが、それでも、まだ山ともつかず、森ともつかぬ灌木林風(クワンボクリンフウ)の荒れた平野

物心のつく
雜木
雜(隹)
ほんと(ほんたう。)

が澤山殘つてゐた。不思議なことには、この溪ぞひには人家といふものが一軒もなかつた。私の物心のつく頃になつて、四國者(モノ)だといふ夫婦が來て、初めて一軒の小屋を建て、瓦(カワラ)燒を始めたのであつたが、今でも續いてゐるかどうかと思ふ。

この溪ぞひの灌木林に、秋になればよく栗が落ちた。他の雜木は少し大きくなれば悉く木炭(コスミモクタン)に燒いてしまふが、栗の木だけは駄目なのださうな。その栗を拾ひに、私たちはよく出かけた。點々として立つてゐるこの栗の木の周圍が、今考へれば殆ど萩だつたらしく思ひ出される。ほんとに深い萩の原であつた。萩ばか

りではなかつたらうが、到る處の雜木に、灌木に、このこまかな木の混つてゐない處は無かつた。身を屈めて落葉の間に落ちてゐる木の實を拾ひながら、時々腰を伸ばして見廻せば、必ずのやうにそこらに咲きしだれてゐるこの薄紅の花びらが眼についた。萩といつてもなか〳〵大きい。しだれて咲いてゐるのですら、子供の私達よりも遙に丈が高かつた。よく熟してゐない栗に出逢ふと、その木に登つて枝を搖動かしながら、まだ青いやうな實を落して取つたものだ。梢から下を見ると、萩が茂つてゐて、そこに待受けてゐる友達の姿など見えはせぬ。「いゝか、落すぞ！」と呼びながら、力

咲きしだれる

一ぱい枝を搖ると、その茂みの中へ、ばら〳〵と音を立てて青い毬が落ちて行つた。

この原には茸もよく生えた。大抵栗の落ちるのとあとさきで、栗をつめた手籠の上に、見事な「しめぢ」や「ねず茸」を載せて歸つたものだ。茸のある處は栗より範圍が廣いので、探すのに骨は折れたが、それだけ樂しみであつた。それに私は、友達大勢とかういふことをするのが嫌で、大抵は自分一人か、乃至は母と一緒ぐらゐであつたので、いつもひつそりと、その廣い雜木の原を屈みながら探して歩いた。萩のほかには女郎花が最も多かつた。林が伐開かれて明かるくなつてゐる草

男郎花

鮠

淀み

原などには、この花が高々と茂つて咲いてゐた。白い花の男郎花といふのもまじつてゐた。

なほ私の忘れられないのは、この原のあちこちに流れてゐる小流で魚を釣る事であつた。それは溪ともいへない位小さな流で、大抵一尺か二尺の幅で流れてゐて、それがそこ〳〵で小深い淀みを作つてゐる。その淀みに棲む魚を釣るのである。勿論流の上には藪が掩ひかゝつてゐるので、竿とても二尺か三尺の長さのものしか使へなかつた。人といふものを知らぬ魚なので、なか〳〵よく釣れた。種類はきまつてゐて、鮠か「あぶらめ」といふ小魚、どうかすると蟹や鰻などの出

あぶらめ

聰しい
聰—總

てゐることもあつた。いつといふこともなかつたらうが、この釣の記憶も必ず秋の季節に係つてゐる。岩から岩を濡れながら這歩いて釣つてゐると、思ひがけぬ見事な栗が、その淀みのなかに落溜つてゐることなどもあつた。折々眼を上げると、その流の上には例の萩の花がしつとりと咲垂れてゐる。朗な秋の日は背に流れて、どうかすると、その溪間の空にはほの白い晝の月の懸つてゐるのを見ることもあつた。水でも飲みに來てゐたのか、野兎の子の聰しい眸が、不思議さうに岩の陰からこちらを覗いてゐたこともあつた。

私は十歳の時限り、殆ど離れ切にこの故郷を離れた

有明月

實在

比叡と熊野

若山牧水著、紀行文集、大正八年（一九一九）五月刊行。

といつてもいゝ。その後、稀に歸ることがあれば、必ずこの原に出かけて行つたが、その時ごとに、幼い頃の記憶とは似もつかぬ狹苦しい原であるのに驚かされた。見廻せばいかにも萩が茂つてはゐたが、心のなかの記憶の原は、行けども行けども果しのない廣い原で、到る處に萩が咲き、栗が實のり、水が流れ、有明月が懸つてゐる、さうした原であらねばならなかつた。不思議とまたさうした原の實在が信ぜられてならぬのである。夏も末、萩の花の綻びかける頃になると、私は必ずのやうにこの原の幻を心に新にするのである。

（比叡と熊野）

松平豆州信綱

松平伊豆守信綱、武藏國川越の城主、江戸幕府の重臣、寛文二年卒、（一六六二）年六十七。

代官

野火留

埼玉縣北足立郡大和田町野火止。

黃金一兩

公儀

十六里

約六十四粁。

溝洫

三三　用水

松平豆州信綱の代官に安松金右衞門といふあり。豆州の領分、野火留といふ所に、武州多摩川の流を引きたらんには、開發の田地もあるべきや否やと、これを議せられしに、いかにも宜しかるべき由を申す。およそ黃金三千兩を費すべきにやと有りしかば、豆州聞きて、「我、此の所を領すとも、又いづかたへ移りなんも知らず。我が三千兩の黃金を費して、永くこの地の利あらんこと、かつは公儀への奉公の一つなり。」とて、安松に命じて多摩川の水を引かんとて、十六里が程溝洫をうがちて

新河岸 埼玉縣入間郡の北部を東南に流れ荒川に注ぐ。

なにさまにも

川越 埼玉縣川越市。

柿紙 柿澁をひいた紙。

新河岸と言ふにいたりたり。

かくて水流れ入るかと待つに、更に水來らずして一とせを經たりけり。豆州、安松を召して、「いかで水は入らざるぞ。」と有りしに、「いかにも水は入るべきにて侍る。なにさまにも故ありぬと存ず。」と言ふ。「その故いかに。」とありしかば、「いまだそのよしをば心得侍らず。」と答へけり。

又の年にも水入らず。また安松を召して尋ね問はれしに、「さりとは入るべきものに候へども、かくのみ侍ること返すゞ〳〵不審に候。たゞこの地は武藏野にて侍れば、およそ川越の城下の人家、常には疊の上に柿紙

請ず

などを敷きて、客來れば、これを卷きて、さて請じ侍る。これ、地かわきて、しかも風常に荒れ、忽ちに座中塵埃に埋れ侍る故なり。然るに、今年は城下の塵埃むかしの様に侍らず。殊に武藏野に植侍りしはたけもの、今年程豐に候ふ事、つひに覺え侍らず。多摩川よりこの溝に流れ入る水を、廣き野に引侍る故に、いまだ流れ來る程の事は侍らぬにや。この水、廣野にみち〳〵たらん後は、

野火止の用水

かならず流れ來るべきものと存ず。」と答ふ。羽生又右衛門といふ代官こゝらをつかさどりければ、やがて召尋ねられしに、「されば、今年ほど野に植ゑし萬づのもの、豐なる事は覺え侍らず。」と申ししかば、豆州またのたまふ事もなし。

又の年にも水來らず。この時、安松を召して尋ねられしかど、去年の如く答へてければ、「汝が地の高下を審にせざるが故に、水流るゝに堪へざるにあらずや。」と言はれけれど、驚く氣色もなし。

三年といふ秋、大雨の降れる後に、雷の鳴るごとく、水音おびたゞしくとゞろきて、この溝にあふれみち、平地

六七寸 凡そ二十糎。

修す 神妙に

遺老物語 朝倉景衡（新井白石の妻の弟）が故老から逸事・逸話を聞書したもの、寫本二十册。

をも水行くばかりにて、六七寸ばかりある鮎の流れくる事おびたゞしく、只ひと時に十六里が程に流れわたり、新河岸の川に流れ入りてけり。

さるほどに田地もひらけて、野火留二百石の地、忽ち二千石の地となりぬ。豆州、安松を召して、「この年頃、汝を責めたりけるに、つひに驚くことなく、重ねて溝を修しなんともせざる事神妙に見ゆるものかな。」とて、一倍の祿賜はりて三百五十石になされたり。その後次第に經あがりて、高き職をもつかさどれり。

（「遺老物語」に據る）

室鳩巣
名は直清、江戸の人、儒學者、享保十九年（三三九四）歿、年七十七。

翁
作者室鳩巣自身をさす。

邪僻妄誕
邪（阝(右)・邑）妄（女）
かしがまし
女郎花の云々
秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花もひと時。（僧正遍照―古今集）

未練

列子
列禦寇、支那周代の賢者、「列子」はその著作といふ、八篇。

二四百年の計

室鳩巣

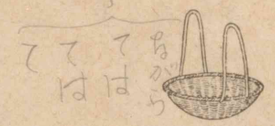
一　愚公が山

翁が心は、知己を一世に求むるにも候はず。昔より、邪僻妄誕にして、根もなき事の盛に世に行はれて、かしがましく聞ゆるは、げに女郎花の一時とや申すべき。大方は續かぬものにこそ。世を歴て正道に返らぬはなし。然るを、心短くして早く驗を見むと思ふは、未練の事と謂ふべし。

諸君、列子が書を見給へりや。「愚公といひし人あり

家居

未耜



寓言

けるが、家居近く山のありしを厭ひて、わきへ移さむとて、日々に子供引具し出でつゝ、手づから未耜を執りて、一簀づつ毀ちとりけるを、智叟といひし人これを見て、『かく大いなる山を、僅かなる人の力にて毀てばとて、毀ち盡くさるべきか。』と其の愚さを笑ひければ、愚公聞きて、『わが代より毀ちそめて、わが子の代にも繼ぎて毀ち、わが孫の代にも、又其の子の代にも繼ぎて毀ちなば、つひにはわきへ移さぬことやあるべき。』といへば、いよいよ笑ひけり。』となむ記し置きける。　もとより寓言なれば、この人あるにはあらねども、愚公がいふやうなる事は、世に愚なりといへば、愚公と名づけ、智叟がいふやう

なる事は、世に智なりといへば、智叟と名づけけるならし。

凡そ天下の事、愚公の心ならば、遅くも一たびは成就すべし。然るに、世に智ありと稱する程の人は、大方智叟が心にて、愚公が山を移すやうのことを聞きては、その愚を笑ふ程に、何事もその功を成就せぬなるべし。然れば、世のいはゆる愚は反つて智なり。世のいはゆる智は反つて愚なり。それ故に禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ。

今、翁も百年論定まるの日を身後に期し待れば、世の明智なる人より見ては、翁が迂濶なる事を笑はるべし。

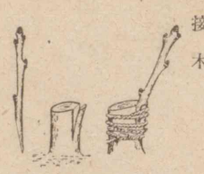
ならし

程に

いはゆる

諷す

迂濶なり



老僻む

接木

忍が岡・谷中　東京市上野公園の地。

かたへ

寛永　後水尾天皇、明正天皇の御代の年號（一三六四―一三四四）。

将軍家　三代将軍家光。

鷹狩

過ぎがてに

思ほえず

渡御

されど老僻めるにやあらむ、此の志を守りて身を終へなむとこそ思ひ侍れ。愚公が山を移すの類なるべし。

二　老僧が接木

忍が岡のあなた谷中の里に、何がしの院とて一つの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其の住僧を知りて、しば〳〵寺に行きつゝ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人に對ひて、前住の時の事をなむ語りしを聞侍りしに、寛永の頃の事になむ、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、徒歩にて此處や彼處御過ぎがてに御覽ましましけるが、此の寺へも思ほえず渡御あり

八旬
みづはぐむ
なか〳〵
やむごとなし
御事
はしたなし
いらふ
心なきこと

しに、折節其の時の住僧は八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつゝ手づから接木して居けるが、御供の人々後れ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、なか〳〵やむごとなき御事をばおもひ寄らねば、そのまゝ背き居たりしを、「坊主何事をするぞ。」と、仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく「接木するよ。」と、御いらへ申ししかば、御笑ありて、「老僧が年にて接木したりとも、其の木の大きになるまでの命も知難し。それにさやうに心を盡くすことの不用なるぞ。」と、上意ありしかば、老僧「御身は誰人なれば、かく心なきことを仰せ給ふか。よくおもうて見給へ。今此の木ども接ぎておき

黒む
強ちに
御紋
徳川氏の定紋三ツ葉葵。
御紋
御物
舊學
舊(自)
正學

なば、後住の代に至りて、何れも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなむと、我は寺の爲を思うてする事なり。強ちに我が一代に限るべき事かは。」と、言ひしを聞し召して、「老僧が申すこそ實にも理なれ。」と、御感ありけり。その程に、御供の人々追々來りつゝ、御紋の御物共多く集ひしかば、老僧それに心得て、大きに恐れて奥へ逃入りしを、御召出しありて、物など賜はりけるとなむ。

今、翁も此の老僧が接木する如く、老朽ちぬれども、ある限りは舊學をきはめて、人にも傳へ、書にも殘して、後世に至りて正學の開くる端にもなり、斯の道の爲に萬

死しても骨云々　其ノ言ノ後世ニ立ツ、此ヲ之レ死シテ朽チズト謂フベシ。（國語）

かし

駿臺雜話　五卷、室鳩巢著、學術・道德に關する隨筆、寛延三年（一七五〇）刊行。

一の助となりなば、翁死してなほ生ける如し。古人の所謂「死しても骨朽ちじ。」と、いひしこそ思ひあたり侍れ。聊か我が身の爲に謀るにあらず。諸君も翁がこの意を信じ給へかし。

（駿臺雜話）

女子新國語讀本　新制版　卷一　終

國語假名遣表

わ・は

語の上でわ・はは互に紛れない。語の中と下とで紛れる。左の外ははと書く。

あわ（泡・沫）
みなわ（水沫）
あわつ（周章）
あわただし（倉皇）
いひわけ（言分）
のわけ（野分）
おひわけ（追分）
うらわ（浦回）
しまわ（島回）
かわく（乾・渴）
くつわ（轡）
はにわ（埴輪）
くわね（慈姑）
ことわさ（諺）
しわざ（爲業）
ことわる（斷・理）
こわいろ（聲色）
こわだか（聲高）
こわね（聲音）
さわぐ（騷）
さわやか（爽）
しわ（皺）
しわし（沓）
すわる（坐）
たわし（束藁子）
たわむ（撓）
たわわに（撓）
たわやか（嬋妍）
たわやめ（手弱女）
たわら（俵）
はらわた（腸）
わ（弱）
ゆわう（硫黃）
よわし（弱）
かよわし（弱）
いわし（鰯）

ゐ・い・ひ

語の上ではゐ・いが互に紛れ、語の中と下とではゐ・い・ひが互に紛れる。左の語の外はひと書く。

ゐ（井）
ゐげた（井桁）
ゐど（井戸）
ゐぜき（井堰）
ゐなか（田舍）
ゐ（居）
ゐざり（膝行）
かもゐ（鴨居）
しきゐ（閾）
くもゐ（雲居）
くらゐ（位）
しばゐ（芝居）
とりゐ（鳥居）
まどゐ（團欒）
もとゐ（基）
ゐ（猪・亥）
ゐのしし（猪）
ゐのこ（豕）
いぬゐ（乾）
ゐ（胃）
ゐる（率る）
ひきゐる（率る）
あゐ（藍）
くれなゐ（紅）
あぢさゐ（紫陽花）
くわゐ（慈姑）
まゐる（參る）
おい（老）
くい（悔）
むくい（報）

え・ゑ・へ

語の上ではえ・ゑが互に紛れ、語の中・下ではえ・ゑ・へが互に紛れる。左の語の外はへと書く

ゑ(繪)
ゑがく(畫がく)
ゑのぐ(繪具)
ゑかき(畫工)
ともゑ(輌繪・巴)
ゑ(餌)
ゑぼし(烏帽子)
ゑむ(笑)
ゑがほ(笑顏)
ゑくぼ(靨)
ゑつぼ(笑壺)
ゑじ(衛士)
ゑふ(醉ふ)
ゑひどれ(醉客)
こゑ(聲)
つゑ(杖)
つくゑ(机)
ゆゑ(故)
すゑ(据)
すゑぶろ(据風呂)
いしずゑ(礎)
すゑ(末)

すゑひろ(末廣)
こずゑ(木末・梢)
うゑ(飢・餓)
うゑ(植)
うゑき(植木)
うゑこみ(前栽)
ちゑ(智慧)
え(兄)
えと(兄弟)
きのえ(甲)
ひのえ(丙)
つちのえ(戊)
かのえ(庚)
みづのえ(壬)
え(枝)
えだ(枝)
しづえ(下枝)
え(江)
いりえ(入江)
ふえ(笛)
さざえ(螺螺)
はえ(映)

ゆふばえ(夕映)
もえ(萌)
もえぎ(萌黃)
みえ(外見)
はえ(生)
ひこばえ(蘖)
いえ(癒)
あまえ(甘)
おびえ(脅)
おぼえ(覺)
きえ(消)
きこえ(聞)
こえ(越)
こえ(肥)
こごえ(凍)
さえ(冴)
たえ(絕)
ひえ(冷)
ふえ(殖)
ほえ(吠・吼)
もえ(燃)
もだえ(悶)

を・お・ほ・ふ

語の上ではを・おが互に紛れ、語の下中ではほ・をが紛れる。おは語の中下に用ひることはない。左の語の外は語の上ではお、中と下とではほと書く。

を(男・雄・夫・牝)
をつと(夫)
をとこ(男)
めをと(夫婦)
たけを(猛夫)
ますらを(丈夫)
をひ(甥・姪)
ををし(雄雄)
を(小)
をとめ(少女)
をぢ(伯父・叔父)
をば(伯母・叔母)
を(女)
をみなへし(女郎花)

を(尾)
をばな(尾花)
を(緒)
はなを(鼻緒)
を(麻・苧)
をけ(桶)
をさ(筬)
をか(岡・丘・陸)
をかぼ(陸稻)
をがむ(拜)
をかし(可笑)
をかす(犯)
をぎ(荻)
をこ(痴・愚)
をこがまし(痴)
をさ(長)
をさなし(幼)
をさむ(治・修・收・藏・納)
をさをさ(大抵)
をしどり(鴛鴦)
をしふ(教)
をしむ(惜)

をす(食・治)
をち(遠)
をちこち(遠近)
をととひ(一昨日)
をととし(一昨年)
をとり(囚・媒鳥)
をどる(踊・跳・躍)
をの(斧)
をののく(慄)
をはる(終・卒・了)
をり(檻)
をり(節)
をり(居)
をる(折)
をしき(折敷)
しをる(萎)
しをり(栞)
つづらをり(九十九折)
をろち(大蛇)
あを(青)
あをがひ(螺鈿・青貝)
あをし・あをむ(青)

いさを・いさをし(功績)
うを(魚)
かつを(鰹)
ひを(氷魚)
しらうを(白魚)
かをる(香薫)
さを(竿・棹)
しをん(紫菀)
しをらし(可憐)
しをる(萎)
たをやか(嫋娟)
たをやめ(手弱女)
とを(十)
ばせを(芭蕉)
まをす(申)
みさを(操)
みを(澪・水脈)
みをつくし(澪標)
やを(徐)

ふと書いてをと發音する場合。

あふひ(葵)
あふぐ(仰)
あふぎ(扇)
あふる(煽)
あふみ(近江)
とほたふみ(遠江)
きのふ(昨日)
けふ(今日)
さふらふ(候)
たふる(仆・倒)
たふとし(貴)
はふる(投)
ふくろふ(梟)

じ・ぢ

じ・ぢは語の上・中・下どこにあつてもじに紛れる。左の語の外はじと書く。

ぢ(父)
をぢ(伯父・叔父・小父)
ぢぢ(爺・祖父)

ち（路）
　やま**ち**（山路）
よみ**ち**（黄泉）
す**ち**（筋）
う**ち**（氐）
ひ**ち**（臂）
あ**ち**（味）
　あ**ち**はひ（味）
あ**ち**（鯵）
い**ち**らし
か**ち**（梶）
か**ち**（鍛冶）
ひ**ち**（泥）
ふ**ち**（藤）
　ふ**ち**ばかま（藤袴）
こう**ち**（麴）
く**ち**ら（鯨）
よ**ち**る（攀）
け**ち**め（區別）
こと**ち**（琴柱）
ね**ち**（螺旋）
　ね**ち**く（拗）

あ**ち**さゐ（紫陽花）
ち**ち**む（縮）
なん**ち**（汝）
もみ**ち**（紅葉）
わら**ち**（草鞋）
なめく**ち**（蛞蝓）
みそ**ち**（三十）
　よそ**ち**（四十）
　いそ**ち**（五十）
　むそ**ち**（六十）

ず・づ

ず・づは語の上・中・下どこにあつてもともに紛れる。左の語の外は、づと書く。

ずす（誦）
ずず・じゆ**ず**（數珠）
ずるし・**ず**るける（狡猾・怠慢）
　あん**ず**（杏子）
　ゆ**ず**（柚子）
いし**ず**ゑ（礎）
こ**ず**ゑ（梢・末）

か**ず**（數）
かなら**ず**（必）
き**ず**（傷・疵・瑕）
く**ず**（葛・國栖）
す**ず**（鈴・錫）
す**ず**き（鱸）
す**ず**し・す**ず**む（涼）
す**ず**しろ（蘿蔔）
す**ず**な（菘）
す**ず**め（雀）
す**ず**り（硯）
す**ず**ろ（漫）
た**ず**む（佇）
な**ず**らふ（準）
ね**ず**み（鼠）
は**ず**（筈・弭）
　やは**ず**（矢筈）
　ゆは**ず**（弭）
は**ず**み（機）
ま**ず**（雜・交・混）
みみ**ず**（蚯蚓）
も**ず**（百舌鳥・鵙）

さ行變格活用の濁れるもの。
禁**ず**信**ず**等

常用漢字

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並
【丨】中
【丶】丸主
【丿】之久乏乘
【乙】乙九乞也乳亂
【亅】了事
【二】二五五井
【亠】亡交亦京亭
【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伸伺似位低住佐何余佳佛作使來例侍供依侮侯侵便係促俊俗保俠信修倶俳俵俸倉個倍倒候借倫群假偉偏停健側偶傍傑備催傳債傷傾僅働像僚僞僧價儀億儉償優
【儿】元兄充兆兇先光克兌免兒
【入】入內全兩
【八】八公六共兵其具典兼
【冂】冊再
【冖】冗
【冫】冬冷凉准凌凍
【几】凡
【凵】凶出
【刀】刀刃分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剩割創劇劍劑
【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸
【勹】包
【匕】化北
【匚】區
【十】十千升午半卑卒卓協南博
【卜】占
【卩】印危却卵卷卽
【厂】厄厘厚原厥
【厶】去參
【又】及友反叔取受
【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑
【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團
【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塗塵境墓塀增墨墮壁壇壓壌
【士】士壯壹壽
【夂】夏
【夕】夕外多夜夢
【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮
【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪

姬姻姿威娘娛娠娼婚婦
婿媒嫁嫡嫌孃

【子】子字存孝季孤孫學

【宀】宅守安宏完宗官定
宜客宣室宮害宴家容宿
寄密富寒察寢實審寫寬
寶

【寸】寸寺封射將專尉尊
尋對導

【小】小少尙

【尢】就

【尸】尺尼尾尿局居屆屈
屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峠峯島
峽崇崎崩

【巛】川州巡巢

【工】工左巧巨差

【己】己

【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣

【干】干平年幸幹

【幺】幻幼幾

【广】床序底店府度座庫
庭庶康廉廓廢廣廳

【廴】延廷建廻

【廾】弄弊

【弋】式

【弓】弓弔引弟弱張强彈

【彡】形彩彫影彰

【彳】役彼往征待律後徐
徑徒得從御復徵徵德徹

【心】心必忌忍志忘忙忠
快念怒思怠急性怨怪怯
恐恥恨恩恭息悔悟悖患
悲惟悼情惑惜惠悪惰惱
想愁愉意愚愛感慈態慕

慘慢慎慣慨慮慰慶慾憂
憐憚憲憶憾憤憑應懲懷
懸戀

【戈】成我戒戰戲戴

【戸】戸戻房所扇

【手】手才打扱扶批承技
抑投抗折抱抵押披抽拂
拍拒拓拔拘拙招拜括拳
拾持指振捕捧描捨掃授
掌排掛採探控推揚接提
換握挿掲揮援損搖捜摘
携摩撫擇擊操擔據擬擴
攝

【支】支

【攴】收改攻放政故敍教
敏救敗敢散敬敵敷數整

【文】文

【斗】斗料斜

【斤】斤斥斬新斷斯

【方】方施旋旅族旗

【无】既

【日】日旦旨早旬旭昇昌
明易昔星春昭昨是映時
晩晝普景晴晶智暇暖暗
暑暮暴曆曇曜

【曰】曲更書曹會替最會

【月】月有朋服朕朗望朝
期

【木】木未末本札朱机朽
杉材村束柿杯東松板枕
林枚果枝枯架柄某染柔
査柩柱柳栗校株根格栽
桃案桐桑梅條梨械棄棋
棒棟森棺植楠業極榮構
概樂樓標樞模樣樹橋機
横檄檢櫻欄權

【欠】次欲款欺歌歎歐歡

【止】止正此步武歳歷歸

【歹】死殊殉殖殘

【殳】段殺毀毀

【毋】母每毒

【比】比

【毛】毛

【氏】氏民

【气】氣

【水】水氷永汁求汗汚江
池決汽沈沒沖沙汰河沸
油治沼沿況泉泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪活派
流浦浪浮浴海浸消涉液
淑涙淡淨淫深混淸淺添
減淵渡溫測港渴湖湧湯
源準溢溶溺滅滋滑滯滴
滿漁漂漆漏演漕漠漢漫

漸潔潛潮澤激濁濃濕濟
濱瀧灣

【火】火灰災炊炎炭烈無
然煉煮煙照煩熟熱燃燈
燒營爆爐

【爪】爪爭爲爵

【父】父

【爻】爾

【片】片版牌

【牙】牙

【牛】牛牧物牲特犧

【犬】犬犯狀狂狩狹猛猫
猶獄獨獲獵獻

【玄】玄率

【玉】玉王玩珍珠班現球
理琴環璽

【瓦】瓦瓶

【甘】甘甚

【生】生產甥

【用】用

【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番畫異畳當疊

【疋】疋疎疑

【疒】疫疲疾病症痘痛痢
療癖

【癶】登發

【白】白百的皆皇

【皮】皮

【皿】皿盆益盛盜盟盡監
盤

【目】目盲直相省眉看眞
眠眼着睡督

【矢】矢知短

【石】石砂砲破研硬硯碁
碎碑確磁磨礎

【示】示社祈祕祖祝神票

祭禁禍福禦禮

【禾】秀私秋科秒租秩移
税程稚種稱稻稿穀積穂
穩

【穴】穴究空突窃窒窓窮

【立】立章童端競

【竹】竹竿笑笛符第筆等
筋筒答策算管箱節範築
篤簡簿籍

【米】米粉粒粘粗粹精糖
糞

【糸】系紀約紅紋納純紙
紛素紡索紫累細紳紹
紺終組結絶絡給統絲絹
經絲維綱網綴綻綿緊緒
線締緣編緩緯練縛縣縫
縮縱總績繁織繕繪繭繰
繼續

【缶】缺

【网】罪置署罰罵罷羅

【羊】羊美羣義

【羽】羽翁翌習翼

【老】老考者

【而】耐

【耒】耕

【耳】耳聖聞聯聲職聽

【聿】肅肇

【肉】肉肖肝股肥肩育肺胃背胎胞胴胸能脅脈脊脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜膝膽臆膺臟

【臣】臣臥臨

【自】自臭

【至】至致臺

【臼】與興舉舊

【舌】舌舍

【舛】舞

【舟】舟航般舵舶船艦

【艮】良

【色】色

【艸】芝花芽芳苑苗若苦英茂茶草荒荷莊菊菌菓栄華萬落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄藏藝藤藥

【虍】虎虐處虛號

【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠻

【血】血衆

【行】行術街衢衛

【衣】衣表袁袋袖被裁裂裏裕補裝裸製複褒襲

【西】西要覆

【見】見規視親覺覽觀

【角】角解觸

【言】言訂計討訓託記訟訪設許訴診詐詔評詞詠試詩詰話詳誇誌認誓誕誘語誠誤說課調談請論諭諸諾謀謁諮講謝謠謹謬證識譜警譯議護譽讀變讓

【谷】谷

【豆】豆豊

【豕】豚象豪豫

【貝】貝貞負財貧貨販貫責貯貳貴買貸費貿賀賃賄資賊賓賜賞賢賣賤賦質賴購贈贊

【赤】赤

【走】走赴起超越趣

【足】足距跡路踊躍

【身】身

【車】車軌軍軒軟軸較載輕輩輪輯輸輿轉

【辛】辛辨辭辯

【辰】辰農

【辵】辺迎近返迫迭述迷追退送逃逆透逐途通速造連週進逸遂遇遊運過道達違遙遞遠遣適遭遲遷選遺避還邊邂

【邑】邦邪邸郊郎郡部郵都鄉

【酉】酌配酒酢酬酷酸醉醜醫

【釆】釋

【里】里重野量

【金】金釜針釣鈍鈴鉛鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錯錄錢鍋鎖鎮鏡鑄鐘鐵鑑鑛

【長】長

【門】門閉開閑間閣閲關

【阜】防附降限陛院陣除陪陳陰陵陶陷陸陽隆隊階隔隙際障隣隨險隱

【隹】隻雀雄雅集雇雌雙雜離難

【雨】雨雪雲零雷電需震霜霧露靈

【青】青靜

【非】非

【面】面

【革】革靴

【音】音響

【頁】頂項順頓預頭領頭頻題額顏願顚類顧顯

【風】風

【飛】飛飜

【食】食飢飲飯飾養餓餘餅館餐

【首】首

【香】香

【馬】馬馳駁駄駐騎騰騒驅驗驚驛

【骨】骨體

【高】高

【髟】髮

【鬥】鬪

【鬼】鬼魂魔

【魚】魚鮮鯉鯛

【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄

【鹵】鹽

【鹿】鹿麗

【麥】麥

【麻】麻

【黃】黃

【黑】黑默點黨

【鼓】鼓

【鼻】鼻

【齊】齊

【齒】齒齡

【龍】龍

【龜】龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと

(二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること

(三) 代名詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと

(四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

（臨時國語調査會發表）

左の字體を本位として用ひること。
（括弧内の小字は字典體）

勧（勸）　権（權）　滝（瀧）　歓（歡）　観（觀）
沢（澤）　択（擇）　訳（譯）　駅（驛）　釈（釋）
変（變）　恋（戀）　蛮（蠻）　湾（灣）
茎（莖）　径（徑）　経（經）　軽（輕）
併（併）　塀（塀）　瓶（瓶）　餅（餅）　研（研）
斉（齊）　斎（齋）　済（濟）　剤（劑）
残（殘）　浅（淺）　賤（賤）　銭（錢）
労（勞）　営（營）　栄（榮）　学（學）　覚（覺）

挙（擧）　誉（譽）　断（斷）　継（繼）
歯（齒）　齢（齡）　湿（濕）　顕（顯）
窓（窗）　総（總）　属（屬）　嘱（囑）
為（爲）　偽（僞）　帯（帶）　滞（滯）
参（參）　惨（慘）　両（兩）　満（滿）
発（發）　廃（廢）　凡（鼠）　猟（獵）
乱（亂）　辞（辭）　潜（潛）　賛（贊）
走（走）　徒（徒）　従（從）　縦（縱）
悩（惱）　脳（腦）　処（處）　拠（據）
担（擔）　胆（膽）　来（來）　麦（麥）
寿（壽）　鋳（鑄）　数（數）　楼（樓）

楽（樂）　薬（藥）　読（讀）　続（續）
竜（龍）　滝（瀧）　随（隨）　髄（髓）
庶（鹿）　麗（麗）　聴（聽）　聽（聽）
虚（虛）　戯（戲）　遅（遲）　解（解）
独（獨）　触（觸）　畳（疊）　摂（攝）
虫（蟲）　蚕（蠶）　仮（假）　児（兒）
励（勵）　嘗（嘗）　国（國）　囲（圍）
円（圓）　図（圖）　壱（壹）　実（實）
写（寫）　宝（寶）　扣（控）　叙（敍）
条（條）　様（樣）　帰（歸）　気（氣）
炉（爐）　犠（犧）　献（獻）　画（畫）

当（當）　尽（盡）　礼（禮）　称（稱）
糸（絲）　欠（缺）　声（聲）　台（臺）
旧（舊）　万（萬）　号（號）　証（證）
豊（豐）　弁（辨）（辯）　逓（遞）　辺（邊）
医（醫）　鉄（鐵）　関（關）　双（雙）
霊（靈）　余（餘）　舘（館）　体（體）
塩（鹽）　点（點）　覚（覺）
闘（鬪）　刺（刻）　亀（龜）

國字表

（下欄の讀み方は歴史的假名遣による。）

ア

鯏 あさり
遖 あつばれ
鮟 あん

イ

鵤 いかるが
鮴 いさざ
鵙 いすか
圦 いり
鰯 いわし

ウ

鰮 うぐひ
繧 うん
饂 うん

エ

鰕 えそ
鮖 えり

オ

鮠 おほぼら
俤 おもかげ
瓱 おろし

カ

鳰 かいつぶり
鰊 かう
糀 かうぢ
嬶 かかあ
鷬 かけす
錺 かざり
樫 かし
鷬 かしどり
鉥 かすがひ
鑁 かすがひ
紹 かすり
纃 かすり
桿 かせ
紹 かせ
梧 かつら
椛 かへで
袴 かみしも
刈 かる

キ

鯤 きぎ
鶚 きくいただき
杣 きこり
鱚 きす
瓩 キログラム
粁 キロメートル

ク

椚 くぬぎ
粂 くめ
喰 くらふ
俥 くるま

コ

咖 こう
凩 こがらし
鮴 こち
鮞 こち
鯀 このしろ
鞐 こはぜ
椢 こまひ
込 こみ
込 こむ

込 こめ
怺 こらふ
怺 こらへる

サ

榊 さかき
笹 ささ
鰀 ささら
癪 さしこみ
鰓 さば

シ

鰯 しいら
琁 しかと
鳴 しぎ
栴 しきみ
躾 しつけ
扨 しぼる
搾 しぼる
癪 しやく
鯱 しやちほこ

ス

椙 すぎ
鯱 すばしり
辷 すべる
膵 すね

セ

躬 せがれ
腺 せん
瓲 センチグラム
糎 センチメートル

ソ

杣 そま

タ

峠 たうげ
凧 たこ
襷 たすき
燵 たつ
鱈 たら

チ

衞 ちどり
諚 ちやう
狆 ちん

ツ

栂 つが
閊 つかふ
閊 つかへ
欄 つき
鶺 つぐみ
辻 つじ
褄 つま

テ

瓩 デカグラム
料 デカメートル
瓲 デシグラム

ト

働 どう
栂 とが
鴾 とき
栃 とち
鯲 どぢやう
迚 とて
迚 とても
鞆 とも

ナ

凪 なぎ
凪 なぐ

鮒　なまづ
鯰　なまづ

ニ

鈕　にえ
鯀　にしん
鳰　にほ
匂　にほふ

ハ

鰭　はえ
硲　はざま
畑　はた
畠　はた
畠　はたけ
鰰　はたはた
鰭　はたはた
働　はたらき
働　はたらく

噺　はなし
鈑　はばき
鍔　はばき
扨　はめる
鱈　はらか
楾　はんざう

ヒ

鰉　ひがひ
鋲　びやう

フ

梵　ふもと

ヘ

瓸　ヘクトグラム

マ

柾　まさ
枡　ます

俱　また
鮪　まて
麿　まろ

ミ

瓸　ミリグラム
粍　ミリメートル

ム

拐　むしる
毛毛　むしる
椋　むろ

モ

杢　もく
籾　もみ
桃　もみぢ
匁　もんめ

ヤ

癒　やがて
鑓　やり

ユ

裄　ゆき

ワ

枠　わく

ヲ

緘　をどし

文部省檢定濟

昭和十三年二月十五日　高等女學校・實業學校國語科用

昭和十二年八月　五　日印刷
昭和十二年八月十五日發行
昭和十三年一月二十二日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十七日訂正再版發行

女子新國語讀本　新制版
定價各金六拾錢

編者　澤瀉久孝　木枝增一

發行兼印刷者　東京市神田區神保町一丁目二十五番地　合資會社　東京修文館　代表者　鈴木金之助

發行者　大阪市東區博勞町五丁目五十六番地　株式會社　修文館　代表者　鈴木常松

發行所
東京市神田區神保町一丁目二十五番地　振替口座東京二六四四番
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地　振替口座大阪四七一一番
合資會社　東京修文館
株式會社　修文館

北

新述和子